

埋蔵文化財調査(園生貝塚)報告書

—昭和63・平成元年度—

1990. 3

千葉市教育委員会

序

貝塚は、原始古代のタイムカプセルと言われます。幾重にも堆積する貝殻の層は、人々が海浜で採集し、ムラに運び、料理した残滓であります。その中には貝殻のほか捕食した動物の骨角、土器・石器などの生活用具、それに炭化物や埋葬人骨等々の多くの遺物を住居跡などの遺構とともに包蔵しています。このような貝塚遺跡は、現在の私たちに、当時の人々の衣食住や精神活動、それに人類の形成過程や当時の自然環境などについての豊かな情報を提供してくれる遺跡として重要であります。

市内には、今回調査をした園生貝塚をはじめ、国指定史跡の加曾利・月ノ木・荒屋敷、それに横橋の4つの貝塚のほか10数例の大型貝塚が点在しています。

これが「貝塚の街・千葉市」のゆえんであります。

しかし昨今、本市は首都圏の中核都市という位置から開発が著しく、住宅建設等に侵食・蚕食された貝塚もありますが、園生貝塚は市街地に近接して所在しているにもかかわらず、幸いにも、土地所有者の方々の努力で比較的良く保存されてきました。

このたび、本貝塚の保護を図る上での基礎作業として、遺跡の内容・範囲などを的確に把握するための調査を実施したところであります。本書はその報告であり、園生貝塚はもとより、多くの貝塚遺跡を保護するための一つの資料としてご活用いただければ望外の喜びとするところであります。

平成2年3月

千葉市教育委員会

教育長 吉田治郎

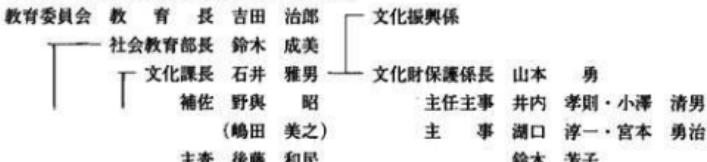
例　　言

- 本書は、昭和63年度・平成元年度に実施した埋蔵文化財発掘調査（園生貝塚）の報告書である。
- 園生貝塚は、千葉市園生町453番地の1ほかに所在する縄文時代後晩期を主体に形成された貝塚を伴う集落遺跡である。
- 本調査は、千葉市が国庫ならびに県費の補助を受け、調査を財団法人千葉市文化財調査協会、測量を日経コンサルタント株式会社に委託して実施した。調査等の組織は次のとおりである。なお（ ）内の氏名は前任者の氏名である。

事業主体者

千葉市

（主管）千葉市教育委員会社会教育部文化課



事業実施機関

（調査） 財団法人 千葉市文化財調査協会

理 事 長 吉田 治郎

常 務 理 事 大 岩 博 一 事 務 局

理 事 稲 葦 秀 雄 局 長 斎 藤 昇

秋 口 守 國 (鈴 木 正 敏)

道 村 潔 补 佐 山 崎 洋 光

杉 山 義 命

山 田 敏

勝 田 明 德

鈴 木 成 美

武 田 宗 久

(高 浦 鞍 男)

(谷 章 幸)

(峯 田 幸 一)

監 事 村 上 孝

高 橋 久 雄

（測量） 日 経 コンサルタント 株 式 会 社

管 理 係 長 山 崎 洋 光

(主査兼) (石 川 公 男)

主 任 主 事 山 崎 英 明

(鈴 木 力)

主 事 志 賀 一 立・立 石 雅 信

事 業 係 長 蓬 師 寺 崇

主 任 主 事 村 田 六 郎 太・寺 門 義 范

田 中 英 世・横 田 正 美

主 事 倉 田 義 広・飛 田 正 美

菊 池 健 一・山 下 亮 介

菱 澄 裕 一

4. 調査の実施期間は、次のとおりである。

昭和63年度 測量調査 平成元年1月28日～平成元年3月25日

ボーリングおよび発掘調査 平成元年2月8日～平成元年3月31日

平成元年度 発掘調査 平成元年11月1日～平成2年1月18日

5. 本書の作成・執筆については寺門義範・山下亮介が担当した。

6. 本書に収録した出土資料および調査記録は、千葉市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

7. 調査にあたって、土地所有者の石橋家・吉田家の各位、および（有）アリス・（株）圓石の各位のご協力、文化庁・千葉県教育庁、その他関係機関のご指導を賜った。厚く御礼申し上げます。

凡例

1. 本書に使用している調査区およびグリッド番号は、調査時のものをそのまま使った。

2. 本書における実測図の縮尺は、原則として次のとおりである。

地形測量図 1/1000

調査区全体図 1/1000

確認遺構図 1/600

遺構実測図 1/20、1/60、1/100

遺物分布図 1/2000

遺物実測図 1/2、1/3、1/4

3. 写真図版のうち、遺跡の全景写真（航空写真）は沢本吉則写真事務所から提供を受けた。

目 次

序
例 言
凡 例

I. 調査にいたる経緯	1
II. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 園生貝塚調査の歴史	2
III. 調査の概要	3
1. 調査の経過と方法	3
2. 層序	4
IV. 貝塚および周辺地域の地形測量調査	5
V. 確認された遺構と遺物	5
1. 確認遺構	5
2. 確認グリッド出土遺物	15
土 器	16
石 器・土製品・石製品	30
VI. まとめ	37

挿 図 目 次

第1図 園生貝塚と周辺遺跡	2	第9図 通状遺構実測図	15
第2図 園生貝塚測量図（岡田 1978）	3	第10図 グリッド出土土器（1）	16
第3図 層 序	4	第11図 グリッド出土土器（2）	17
第4図 第1号土壤および埋設土器実測図	6	第12図 グリッド出土土器（3）	18
第5図 貝塚南側区域の確認遺構	7・8	第13図 グリッド出土土器（4）	20
第6図 土手状地形の平面・断面図	9	第14図 グリッド出土土器（5）	21
第7図 貝塚西側区域の確認遺構	11・12	第15図 グリッド出土土器（6）	22
第8図 貝塚中央部・東側区域の確認遺構	13・14	第16図 グリッド出土土器（7）	23

第17図 グリッド出土土器（8）	24	第23図 出土石器実測図（1）	31
第18図 グリッド出土土器（9）	25	第24図 出土石器実測図（2）	32
第19図 グリッド出土土器（10）	27	第25図 出土土製品・石製品実測図（1）	33
第20図 グリッド出土土器（11）	28	第26図 出土土製品・石製品実測図（2）	34
第21図 グリッド出土土器（12）	29	第27図 遺物の分布傾向図	38
第22図 グリッド出土土器（13）	30		

付 図 目 次

付図1 園生貝塚地形測量図

付図2 園生貝塚調査区全体図

表 目 次

第1表 園生貝塚出土石器計測表	35
第2表 園生貝塚出土土製品・石製品計測表	36

図 版 目 次

1. 園生貝塚全景	10. 調査スナップ
2. 園生貝塚全景	11. 第1号土壌およびグリッド出土土器
3. 住居跡検出状況	12. グリッド出土土器
4. 第1号土壌遺物出土状況	13. グリッド出土土器
5. 土器捨て場堆積状況	14. グリッド出土土器
6. 遺状遺構検出状況	15. グリッド出土土器
7. グリッド遺物出土状況	16. グリッド出土土器
8. 表土除去状況スナップ	17. グリッド出土土器
9. 調査スナップ	18. グリッド出土土製品・石製品

I. 調査に至る経緯

園生貝塚は、「長者山貝塚」として明治時代から知られた貝塚で、多くの研究者によって発掘されてきた。地元の旧家石橋家所有の山林に所在し、比較的良好な状態で現在まで受け継がれてきた。

昭和60年10月、石橋家から遺産相続に係わる土地処分に伴い、埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。貝層部は概ね表面観察で範囲を知ることができるものの遺跡の拡がりについては判然としないため、所有者の協力を得て20地点の試掘を行い、その結果を基に、同年12月石橋家へ遺跡の範囲等についての回答をした。

翌61年1月、(株)藤木工務店から石橋家の山林を使用して迷路を建設したいので検討して欲しいとの要請があり、さらに2月中旬、グローバルインフォメーションサービス(株)が地権者の協力の下に、新会社「アリス」を設立して迷路を運営するとの話があった。これに対し市文化課では、事業者名で新たに埋蔵文化財の所在等の照会を提出させ、その取り扱いについて協議するように指導した。

爾後、照会に基づき、(有)アリス・県・市文化課の三者間で具体的な設計協議をもち、施設は貝層部から外し、施工及び原状復帰の際にも地下の文化財に影響を与えないなどの点で合意をみた。施設に係わる一部の確認調査実施後、建設着工し7月末に迷路はオープンした。しかし、重要な貝塚の一つにも係わらず、基礎資料が欠如していることから昭和63年度・平成元年度の2ヶ年にかけて園生貝塚の遺跡規模・性格等を把握するための確認調査を実施するに至った。

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

園生貝塚は、東京湾に開析する汐田川谷に流れ込む園生川支谷の最奥部、標高25m余を測る台地上に占地している遺跡である。この汐田川の上流域は宮野木川と呼ばれ、両岸の台地上は縄文時代貝塚の密集している地域の一つとして知られている。まず左岸台地には、台地縁に沿って奥から早期～晚期の鳥込台貝塚、早期後半の鳥込貝塚・鳥込東貝塚、それにエゴタ遺跡が近接して所在し、また右岸台地には前期闇山式期の谷津台貝塚をはじめ、早期後半の東ノ上東貝塚・中期後半～後期の東ノ上西貝塚・小仲台A遺跡などが谷をはさんで対峙している。

これに対して本遺跡のある園生川支谷に面した台地には、本遺跡を除くと貝塚遺跡としては地点貝塚をもつ向原貝塚があるのみで、他は中期後半～後期の狐塚遺跡、早期後半の向原遺跡など数か所の散布地が所在しているにすぎず、汐田川上流域の宮野木川流域とは趣を異にした遺跡の分布様相を呈している。



第1図 園生貝塚と周辺遺跡 (千葉西部 1:25000)

2. 園生貝塚の調査の歴史

園生貝塚の名が学界に知られるようになったのは比較的古く、1887(明治20)年上田英吉によって著された「下総国千葉郡介墟記」に記載されたのが最初である。しかしこのときは調査の記録としてではなく、千葉郡内に所在する遺跡の一つとして紹介されたにすぎなかった。

園生貝塚が近代学問としての考古学的視点から新たに注目されるようになったのは、1906(明治39)年、当時の日本考古学を近代的な学問として位置づけるために精力的な活動をしていた東京人類学会による第2回遠足会の折りの調査が最初である。その時の経緯については、大野雲外などによって報告された「園生貝塚に就いて」(人類学雑誌 22-249)の中に詳しいが、実際は研究的態度をもって取り組んだ参加者はほんの一握りだけで、参加者の多くは単に珍奇な遺物を得て個人の満足感を満たすために終始した発掘であったらしい。しかしこの時の調査で得た遺物は、その後、組織的に調査が行われなかつたということもあって、昭和の前半期まで園生貝塚を語る特徴的な資料として研究に役立てられてきた。

戦後の混乱期を経て再び園生貝塚が脚光を浴びるようになるが、それは相次ぐ大学を中心とする調査・研究に負うところが大きい。すなわち、1947(昭和22)年以降度数にわたる明治大学の調査をはじめ、1950(昭和25)年の早稲田大学による貝塚東南部分の調査、また千葉大学が1951(昭和26)年から10年余歳月をかけて継続的に実施した先史地理学的な立場からの沖積

地質学的編年を目指した調査などがあげられる。前二者の調査は、それなりに考古学的な成果を上げたものの、調査範囲の制約などから遺跡を部分的に理解したにとどまり遺跡全体の把握までには至らなかった。また千葉大学の調査にあっても、馬蹄形貝塚を総断するような発掘区を設けて調査したもの、沖積地質学的編年研究に固執する余り考古学的な成果という観点からみると疑問が残る。

これら一連の大学による調査が一段落してからは、本格的な発掘調査もなく折り、論文に遺跡名が掲載されるに留まっている。

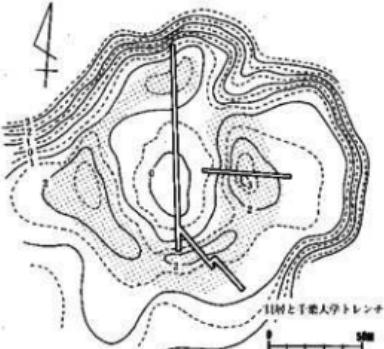
III. 調査の概要

1. 調査の経過と方法

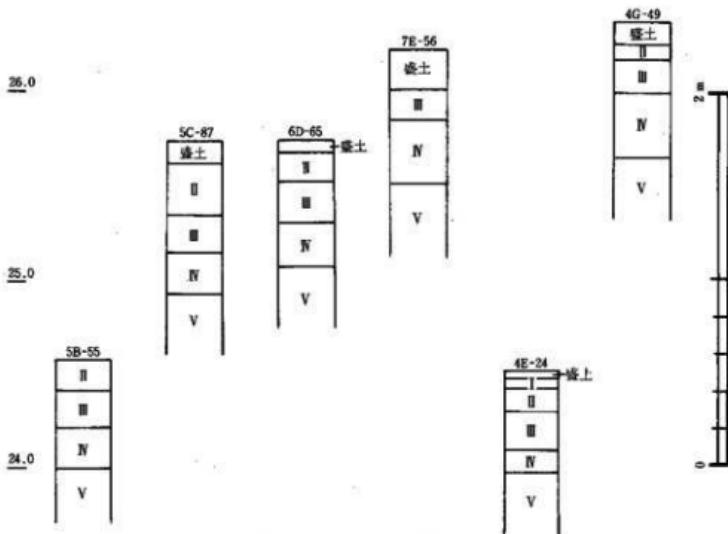
調査は、大型貝塚を伴う集落跡である本遺跡の保護のため、現状の基礎資料を得ることを目的として実施したもので、貝塚およびその周辺部の地形測量調査と確認調査とを昭和63年と平成元年の2ヶ年に分けて行なった。

昭和63年度の調査は、地形測量調査と本遺跡の南限を確かめるための確認調査を行なった。地形測量調査は、周辺地形350m四方を含むボーリング探査によって確認した貝層の分布範囲を実測・測量し、併せて貝塚中央部とその周辺部に測量基準杭の埋設を行なった。また遺跡の南限を調べるために確認調査は、本遺跡南側の調査対象区域に 2×2 mの確認グリッドを20ヶ所設けて実施した。この調査では、住居跡などの遺構を確認するまでには至らなかったが、縄文土器を含む遺物包含層(Ⅲ層・平成元年度のⅣ層に対比)の拡がりを確かめることができ、その遺物の出土状況などから周辺に遺構の存在する可能性が予想された。

また平成元年度の調査は、前年度に引き続き確認調査とし、馬蹄形に拡がる貝層の周辺および貝層の内側部分を調査対象区域にして実施した。なお貝塚東側の遊戯場施設内については、昭和62年の遊戯場施設建設に先立って確認調査を実施しているので、今回の調査対象区域からは省き、それ以外の区域を調査対象とした。調査に先立ち公共座標を基準として50m方眼の大調査区を設け、さらにその中を5m四方の調査区に細分して、この調査区を単位に原則として 2×2 mの確認グリッドを1ヶ所ずつを設けた。また調査の状況に応じ拡張区を設定した。



第2図 岩生貝塚測量図（岡田 1978年転載）



第3図 土層柱状図

調査は、対象区域の現況が山林や駐車場用地のため表土除去は重機を使用し、II層面から手掘りで掘り下げ、発掘作業は貝層および住居跡など遺構の確認されたグリッドではその確認面までとし、確認されないグリッドについてはソフトローム層上面まで行った。この調査の結果、調査対象区域が貝塚部分に近接したことによって住居跡や土壤など縄文時代の多くの遺構が種々の遺物とともにほぼ全域にわたり密度濃く分布していることが確かめられ、本遺跡が貝塚を取り巻く大集落遺跡であることが新ためて明らかになった。その他今回の調査では、古墳時代の住居跡や中世以降の溝と考えられる遺構の存在も確認し、2年1月18日に埋め戻しを完了して調査を終了した。

2. 層序

本遺跡の基本層序は、概ね表土層（I層）・暗褐色土層（II層）・黒褐色土層（III層）・暗赤褐色土層（IV層）・ソフトローム層（V層）・ハードローム層（VI層）に分けられるが、貝塚南側部分および東側区域に所在している遊戯施設周辺では、I・II層が削平されたり施設用地のための盛土造成のされている地区が認められ、特にその度合いは東南に走る16号国道際に寄るに従って顕著に認められた。

これらの層堆積のうち遺物の包含層は、III層（黒褐色土層）とIV層（暗赤褐色土層）との二枚の層で確かめられており、III層が縄文後期中葉から晩期前半期、IV層が中期後半から後期前半期の遺物をそれぞれ包含していた。なお貝塚西側部分においては、IV層中に中・後期の遺物

とともに前期後半期の遺物も包含されている。また遺構は、古墳時代の遺構がⅢ層下部で、縄文後期後半から晩期の遺構がⅣ層上面で、それに中期後半から後期前半期の遺構がⅣ層中位でそれぞれ確認された。

IV. 貝塚および周辺地域の地形測量調査

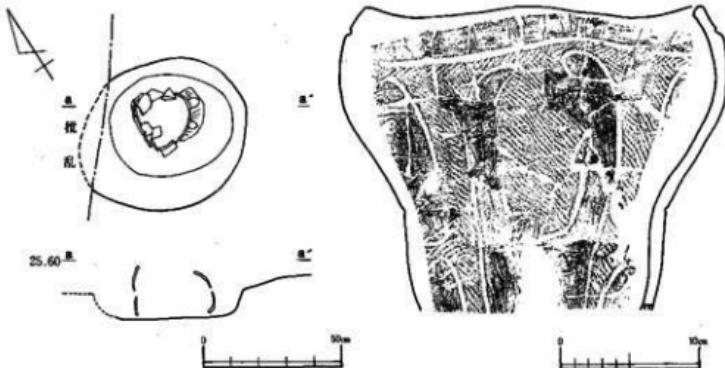
本調査は、径10mm、長さ1mの鋼鉄棒で貝塚の縁辺を概ね1m間隔にポーリングして貝層の有無を確認し、貝層確認部分を石灰で表示して現況測量図作成の基礎にした。この作業においては、過去に行われた幾多の発掘によって移動した貝層か、縄文時代以降の堆積をそのまま維持している貝層かを判別できない限界はあるが、貝層の拡がりとその形状を概ね把握することはできた。測量は、千葉市の公共座標（建設局土木部道路調査課所管）に基づいて、貝塚を中心とする主体部分は地上測量とし、その周辺は航空測量図の成果を利用して、500分の1の現況測量図を調整した。また本貝塚の今後の調査資料の集成に資するため、遺跡内に基準点（杭）B1からB12の12地点を埋設した。

貝塚は、北側の溺れ谷にむかって開口する馬蹄形を呈し、南北径135m、東西径110mである。開口部の中央は周囲より0.7m高く、その頂点より北斜面にかけて20m×30m規模の貝層1ヶ所が認められる。馬蹄形の貝層幅員は25~30mで、最高所は標高29.7mの小祠のある南側貝層である。貝塚の中央部は貝層頂部から2.5~3.6m、台地平坦部から1.4~2.0m低い凹地である。貝塚の東~南~西側は標高25.5~27.0mの平坦地が広がる。東側は台地端が京葉道路の側道で削られているが、一部旧状を残す斜面があり、さらに奥は東から西方向へ浅い溺れ谷の形跡が認められる。南側は「迷路」になっているが、国道16号線までは平坦である。南側には、戦時の戦車待避壕跡と伝えられてる2条の溝があり、さらに南は住宅地が広がる。

V. 確認された遺構と遺物

1. 確認遺構

調査は、前述のように昭和63年と平成元年の2ヶ年に分けて実施しているが、昭和63年度の南限確認の調査では遺構の所在を確かめることができなかつたために、ここでは平成元年度の調査で確認した遺構について報告する。遺構は、貝塚の内側部分でも検出したが、その多くは貝層の外側で検出された。これらの遺構の内訳は、縄文時代中期~晩期の住居跡38軒・土壙51基・溝5条・道状遺構1条・貝層9ヶ所（内、貝ブロック6ヶ所）・土器捨て場遺構1ヶ所、それに古墳時代住居跡1軒、中近世の所産と考えられる溝3条、時期不明の土壙63基からなっ

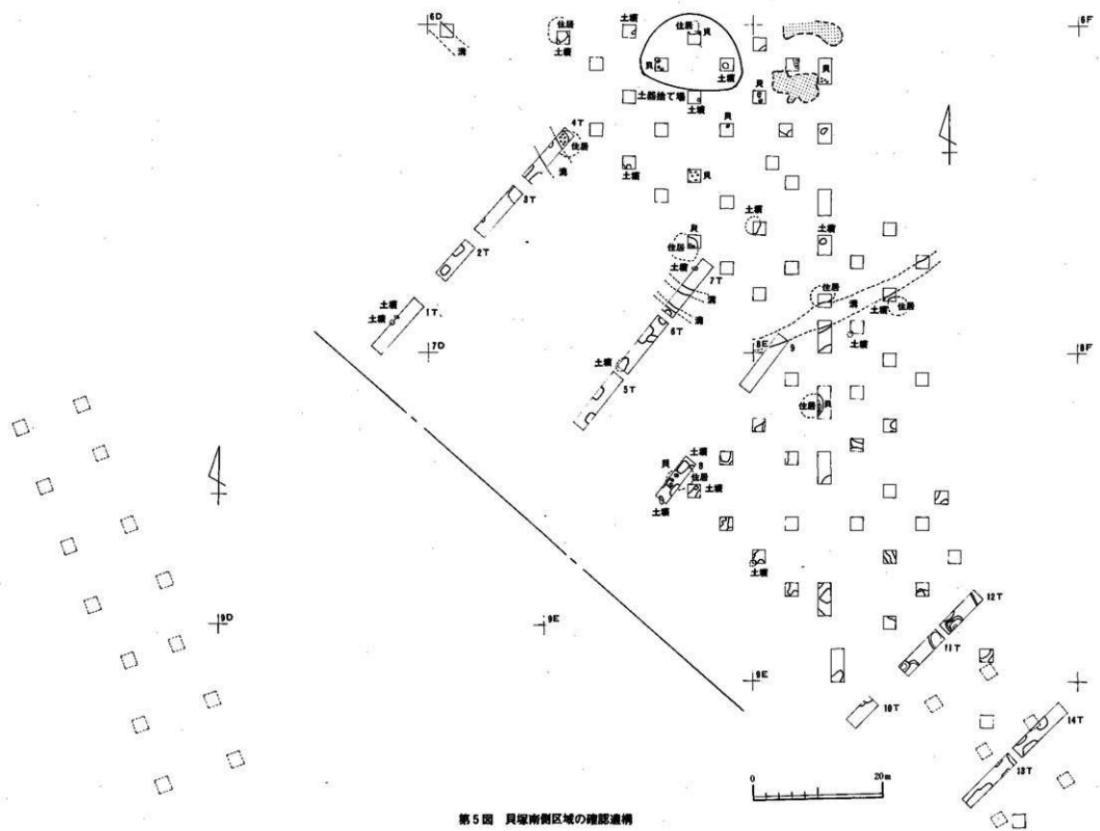


第4図 第1号土壤および出土土器実測図

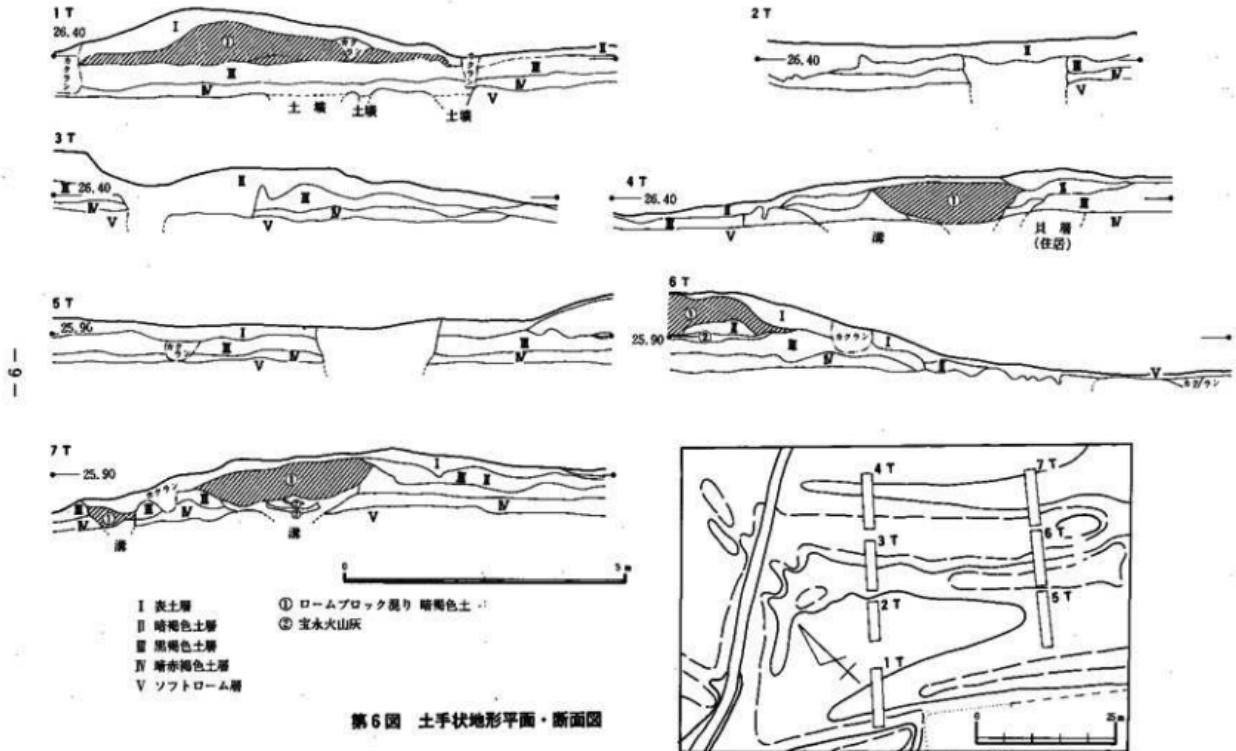
ており、特に本遺跡を特徴づける縄文時代の遺構は、貝層の周辺部に密度高く展開しているのが確かめられた。そこでこれら確認された遺構の概要を述べるにあたり、便宜的に調査区域を貝塚を中心にして南側・西側・中央部、それに東側の4区域に分け、それぞれの区域を特徴づける遺構を中心に概要を述べることにする。

貝塚南側区域（第5図）

6D・7D・6E・7E・8Eの調査区と昭和63年度の確認トレンチからなる区域で、土手状の地形をもつ南側を除く大部分が遊戯施設の駐車場用地として使用されていたため、地点によってはすでにⅢ層中位まで削平がおよびその上に盛土をしていることから、遺構の確認はⅣないしV層面で行なった。確認した遺構は、6D・7D・6E・7Eの4つの調査区に集中する傾向がみられ、中でも縄文時代の遺構は貝層寄りの区域で顕著に発見された。住居跡は8軒が確認されているが、いずれも縄文時代のもので6D-41グリッドで確認した住居跡が中期後半期のものである以外はすべて後期後半から晩期に属するものと考えられ、住居の覆土に小型のハマグリ・オキアサリ・キシャゴなどの貝殻をブロック状に包含しているのが特徴的に認められた。また土壌は14基を確認しているが、このうち7D-85グリッドで検出した土壌はすでに上半部が削平などによって壊され、埋設土器が露出していたために第1号土壤として調査をした。（第4図）調査の結果、確認面のV層面では、径60cm余、深さ10cmを測る底の平坦な円形プランの土壤で、底面のほぼ中央に胴下半部を欠いた加曾利EⅣ式土器が口縁部を下にした倒立状態で埋設されていた。土壤の埋土は粒子の細かな暗褐色土の単層のみで、土壤の確認面から倒立された胴下半部が10cm余突き出していたことからこの土壤が作られた当時の掘り込み面は、V層面より10cm前後上位のⅣ層中にあったものと考えられた。埋設土器は、加曾利EⅣ式の特徴をよくもっている土器で口径24.9cm、現器高22.0cmを測る。形状は口縁が緩い波状を呈し、



第5図 岡塚南側区域の確認遺構



第6図 土手状地形平面・断面図

胴上部に最大径をもち胴下半にかけて円筒状に収束する深鉢で、文様は内傾する口辺に周回する沈線によって区画した無文帯をもち、それ以下は地文としてR・L捺りの単節繩文を施し、その上に上端が二股に分かれる逆U字状の沈線と上下二段の円形沈線を交互に懸垂させ、沈線間を磨消して文様モティーフを作り出している。胎土は微砂を含むが、焼成は良好といえる。

そのほか、Ⅲ層中に貝ブロックの堆積が6グリッドで確かめられている。このうち6E-12・22グリッドで確認した貝層は貝塚本体に連続するものと思われるが、それ以外のグリッドでの貝層は、位置的に考えていずれもブロック堆積をしているものと考えられた。また6D-72・81・92の3グリッドのⅢ層からは、後期後半期を主とする大小の土器片がそれぞれ1000片以上のまとまりをもって出土した。いわゆる土器塚ないし土器捨て場と考えられる遺構でその拡がりは15m余におよぶものと思われる。6E-58グリッドで確認した溝はⅢ層面を掘下げている溝で、6E調査区の9トレンチ、6D調査区の4・7トレンチを経て、西側調査区の5C-21グリッド方向へ延びていた。出土遺物もなくその性格は不明であるが、埋土上部に宝永火山灰の堆積がみられるところから中世以降の所産と考えられる。しかも調査区南側にみられる土手状地形の下部を貫通していることから、この土手状地形より古い時期の溝と考えられる。この土手状地形は、第6図に示したように盛り土もローム混じりの单層でⅡ層を削平した後に盛り上げられており、先に述べた中世以降の溝が下部に位置づけられることから、近世以降の地割りの一種と考えられた。

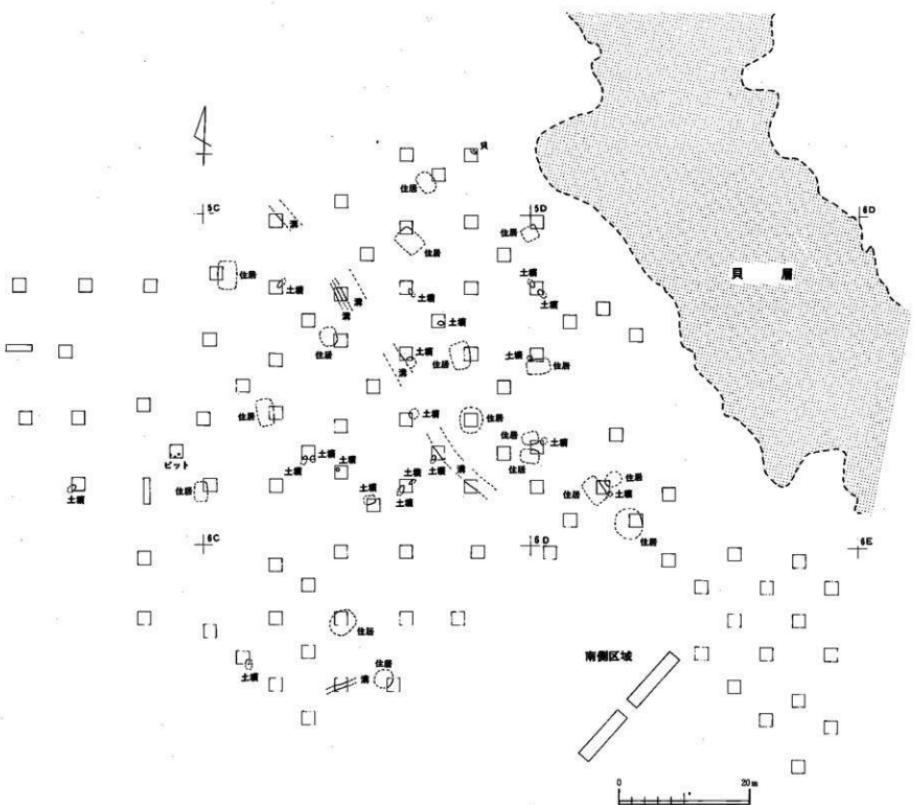
貝塚西側区域（第7図）

5B・4C・5C・6C調査区と貝塚に接する5D調査区を範囲とする区域で、縄文時代中期後半から晩期前半期の住居跡17軒と土壙19基、貝ブロック1ヶ所、それに南側調査区から続く中世以降の溝のほか新たに1条の溝を確認している。このうち住居跡は、貝塚に接した4C-79・5D-1・5グリッドで検出したものが後晩期に属すのに対して、貝塚から離れた位置に検出された住居跡はいずれも中期後半期の所産であった。このことはグリッドから出土する遺物からもいえることであり、本遺跡における貝塚西側の区域は、中期後半期を主体とする遺構群が広く分布しているものと考えられる。

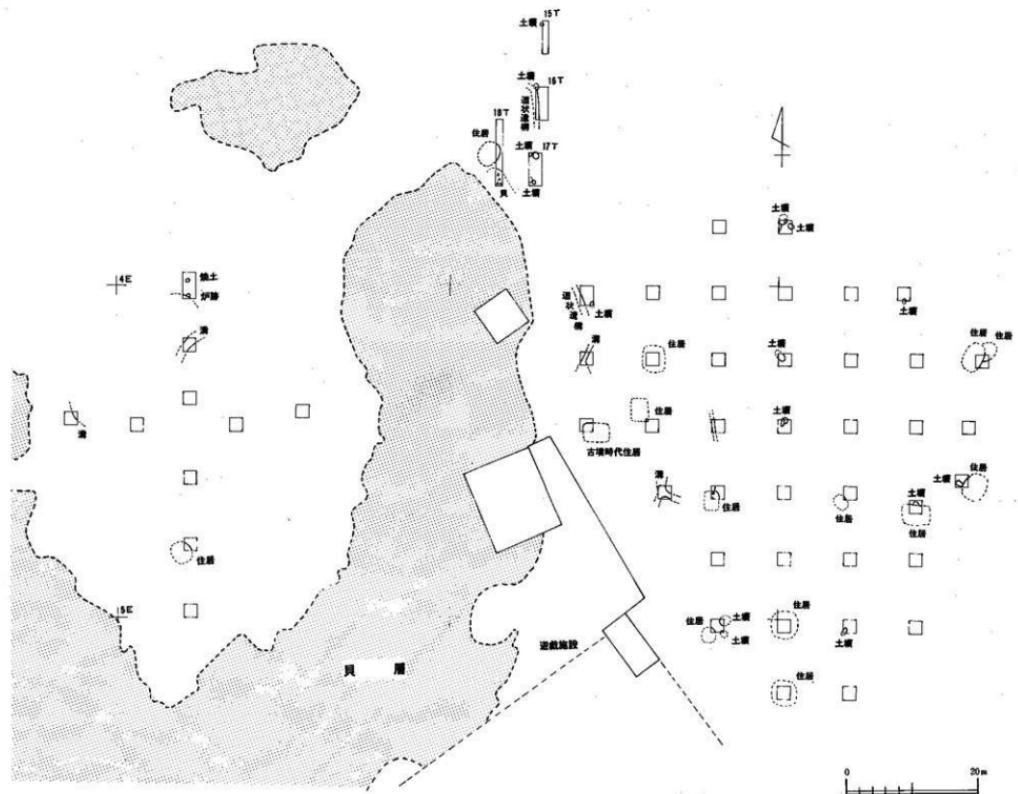
貝塚中央部（第8図）

馬蹄形の貝塚の内側に設けた4D・3E・4Eの調査区を範囲としている。調査面積は44m²と4つの調査区域の中ではもっとも少ないものであったが、貝層寄りに良好な晩期の遺物包含層が確かめられ、遺構は中央南寄りに晩期住居跡1軒、それに貝層内側を周回していると考えられる溝と中央付近を南北に走る溝との2条の溝が確認された。このことから本区域は縄文晩期に主要な役割を果たしていた地域と考えられる。

貝塚東側区域（第8図）



第7図 貝塚西侧区域の確認遺構



第8図 貝塚中央部および東側区域の確認構造

3F・4F・5F

および3G・4G・

5Gの調査区からな

る区域で、15-18ト

レンチは斜面に設け

た調査区である。確

認した遺構は、縄文

時代のものとして住

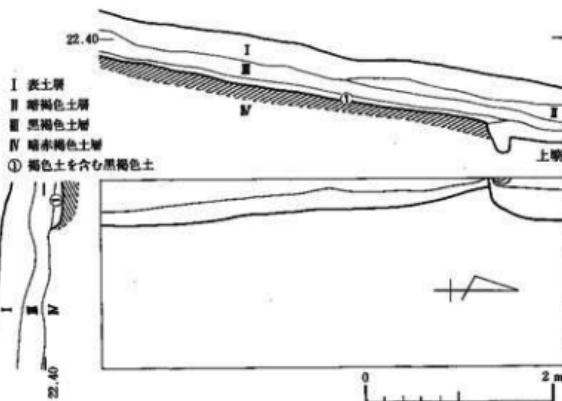
居跡12軒・土壙16基

・溝3条、それに貝

層1ヶ所・道状遺構

1条があり、古墳時

代のものとして唯一



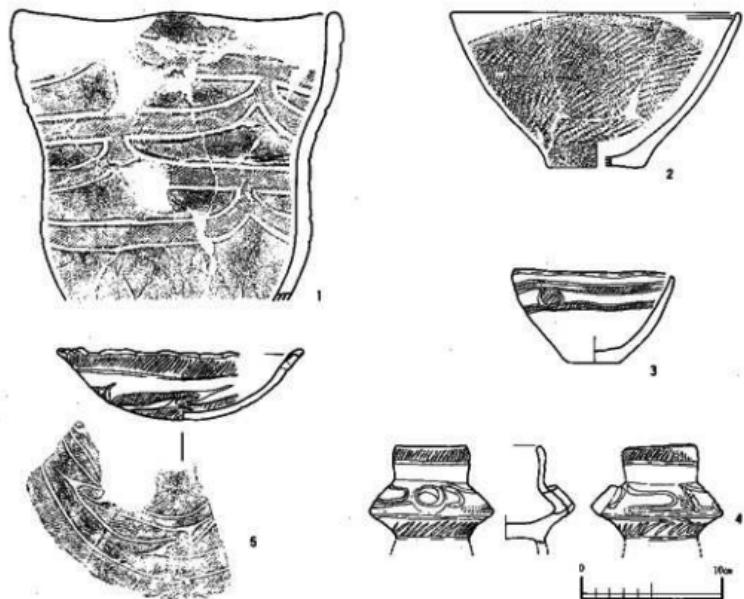
第9図 道状遺構実測図

住居跡が1軒検出されている。これらの遺構のうち台地上平坦部で確認した縄文時代の遺構は大部分が後期前半期に属し、貝層隔壁地および北側斜面のそれは晩期前半に位置づけられるもので占められていた。中でも16トレンチと4F-41グリッドで確認した道状遺構は、第4図でもわかるようにⅢ層下部とⅣ層の間に検出されており、明らかに踏み固められて固化した10cm余の土層がⅣ層面を窪ませて堆積しているものである。しかも固化している土層の上面はU字状の緩い凹地となり、その凹地に焼土・カーボン粒を含んだ褐色土が晩期前半の遺物を包含して堆積しており、晩期前半期の谷底から台地上に通ずる道と判断したものである。また唯一検出した古墳時代の住居跡は、台地平坦部で確認したが単独の検出のためどのような性格をもつものなのかは明らかにするまでには至らなかった。

以上、地区を4つに分けて調査によって確認された遺構を大まかに概観したが、前述したように本遺跡の主要な部分を占める縄文時代の遺構は、調査対象区域のはば全域に広く展開しており、時期毎の居住エリアの総合によって本遺跡が形づくられて行ったものと考えられる。

2. 確認グリッド出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、量的に極めて多い。時代の上からみると縄文時代と古墳時代の遺物とに大別できるが、古墳時代のものは土師器片が少量出土しているのみでその大部分は縄文時代の遺物によって占められている。内容的には、縄文前期と中期後半から晩期に属している遺物で、確認調査としては膨大な量の土器のほか、石器・土製品・石製品など内容もバラエティに富んでおり、圓生貝塚という大貝塚の集落跡を物語るのにふさわしい内容を備えているものと思われる。このような理由からここでは、主として縄文時代の遺物を中心にして述べ



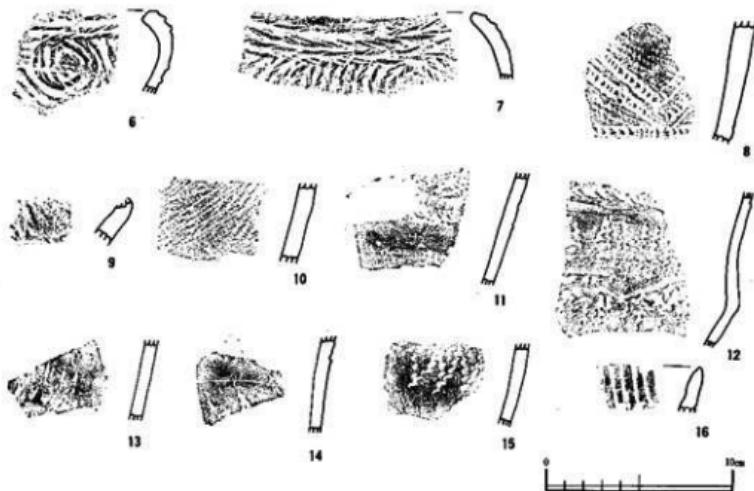
第10図 グリッド出土土器（1）

て行くことにする。

土 器

調査で出土した縄文土器は、縄文時代前期後半および中期後半から晩期前半期に位置づけられる資料である。これらの土器のうち前期後半期の資料は、従来、本遺跡から出土したという報告例も無く、初めての知見としてその出土は貴重と考えられる。また土器総数は20,000点を越えるもので、このうちほほ原形のわかる個体は先述の第1号土壙に埋設されていた土器のほか、5個体がある。そこで整理を進めていくにあたって、これらの土器をつぎのように編年的観点から6群に大別して記述していくことにする。

- 第1群 前期後半の土器群（諸磯・浮島式系）
- 第2群 中期末の土器群（加曾利E式）
- 第3群 後期前半の土器群（称名寺・堀之内T式）
- 第4群 後期中葉の土器群（加曾利B式）
- 第5群 後期後半の土器群（曾谷・安行1・2式）
- 第6群 晩期前半の土器群（安行3a・3b式）



第11図 グリッド出土土器（2）

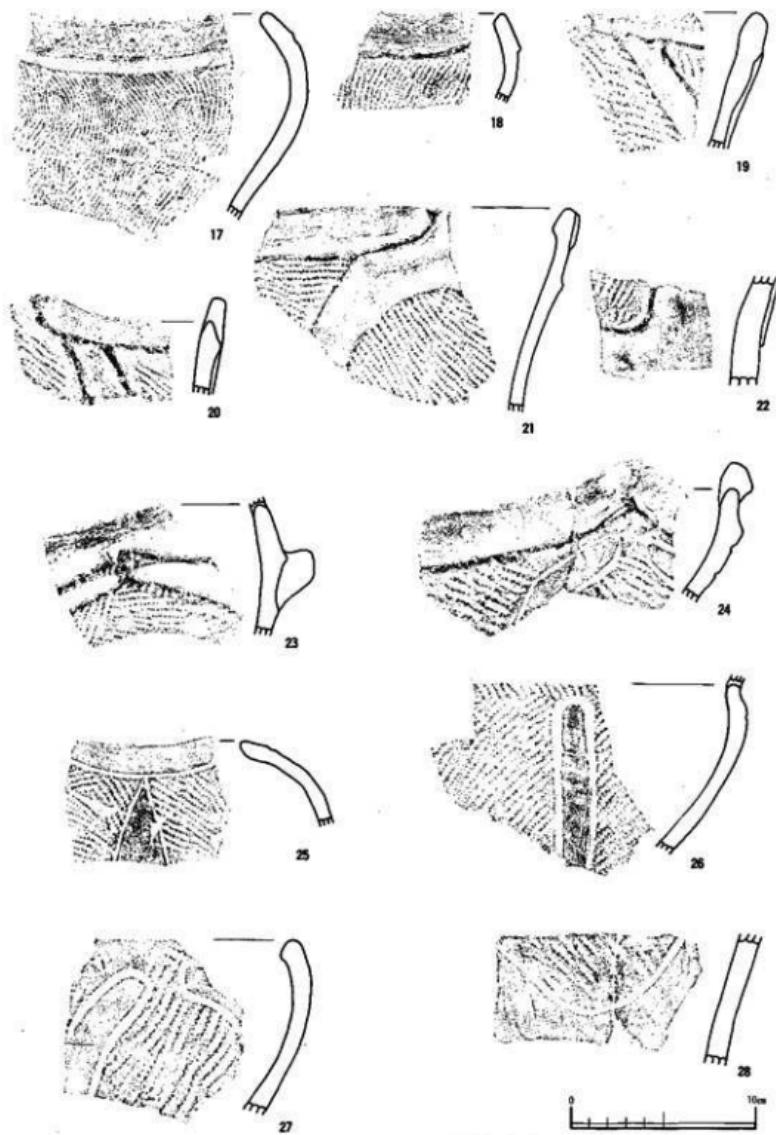
第1群 前期後半の土器群（第11図）

前述したように本遺跡では初めてその存在が知られた土器群であり、遺物量は93点と全体量に占める割合は少いものの、貝塚の西側調査区域に集中的に出土している。復元して原形を明らかにできるものではなく、破片のみの出土である。型式的には、諸磯Ⅰ式と浮島Ⅲ式が主体をなしており、少量の諸磯a・浮島I・II式および前期末の土器が出土した。

6-10は諸磯Ⅰ式である。6・7は典型的な深鉢で、内溝する口縁外周に粘土紐でモティーフを描き、その上に刻みを施しているものであり、9は胴部破片である。8・10はL摺りないしR摺りの縄文地に連続爪形文や半截条線を施文したものである。また11-16は浮島Ⅲ式と考えられる。いずれも器面にはアナグラ属の波状貝殻文を横走させて施したものであり、貝殻の引きびり痕がみられる。11・12については変形爪形文も併用しているものである。図示した資料の胎土・焼成はいずれも比較的良好といえる。

第2群 中期末の土器群（第12図）

中期末葉に位置づけられる土器群を一括した。全体の中では約15%の3,000点余を占め、そのうち口縁部破片は約12%強を数えている。この種土器群には大木9式以降の形状や文様モティーフが濃厚にみられ加曾利EⅢ式とEⅣ式とで構成されるが、先の第1号土壤埋設のEⅣ式以外復元できる資料はなくすべて破片である。量的に加曾利EⅢ式に比してEⅣ式とされるものが圧倒的な数量を占め、図示した資料はすべて加曾利EⅣ式である。これらは口縁に沈線や微隆起帯を巡らしているもの、また口縁から胴部にかけて細い沈線で区画した中を磨消したり



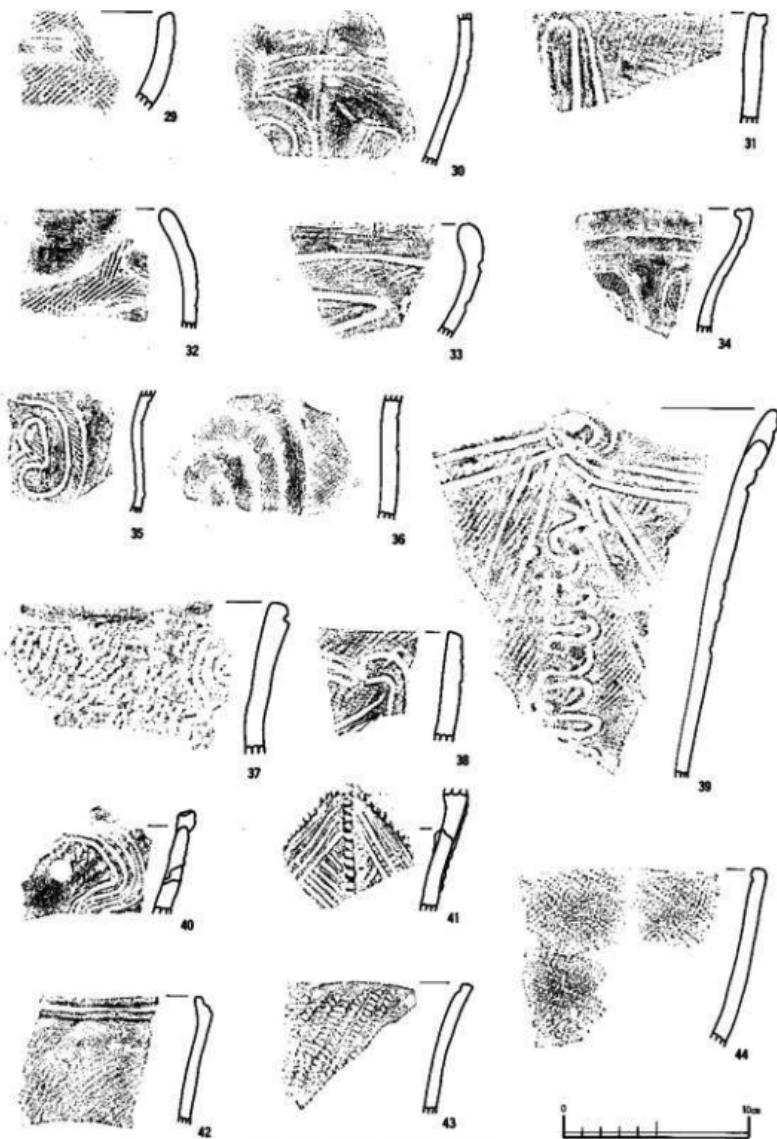
第12図 グリッド出土土器 (3)

しているものからなる。17に内溝する口縁に沿って太めの沈線を巡らし繩文と画した無文帯を作りだしているものであり、18~22は沈線のかわりに微隆起線を用いている。19~21については口縁に巡る微隆起線から胴部にかけて懸垂する微隆起線を配し、その間を楕円やU字状に磨消したものである。23・24は緩い山形波状口縁をもつ資料で、23は摘み状突起をもつ隆起帯を口縁に沿って巡らして口縁無文帯部を作りだし、24の資料は口縁波頂部と連結する摘み状突起をもつ一条の隆起帯で無文部を作りだした直下に細い沈線でU字状の磨消し区画をもったものであり、文様モティーフの推移が想定できる資料と考えられる。また25~28は、E IV式の中でも後続の称名寺式により近い部分を形づくっているグループである。器面には幅の広い沈線や微隆起線は施されず、地文繩文の上にU字状・逆V字状、それに楕円に細い沈線を垂下させその中を磨消すことによってモティーフ文を描きだしているものである。

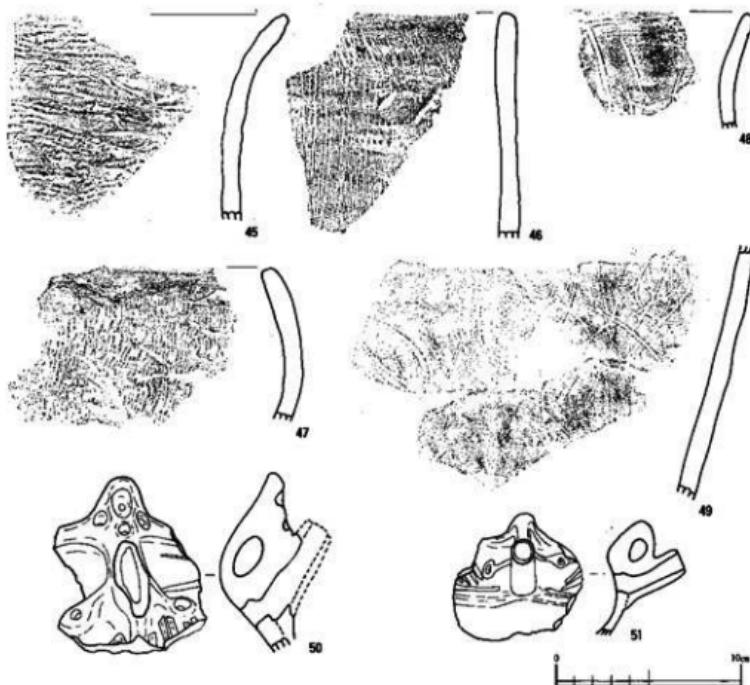
第3群 後期前半の土器群（第10図1・2 第13・14図）

称名寺式ならびに堀之内I式に属しているものを本群とした。総出土量は6,000点余を数えるが、ほぼ原形のわかる2個体を除くと他はすべて破片である。このうち第10図1および第13図29~36は称名寺式の古い部分に比定できる資料であり、本群土器中の約3割がこの種土器で占められている。1は3トレンチⅢ層下部から破片で出土したもので、復元の結果形状がわかる資料である。胴下半は欠けているため不明であるが、口縁は4つの小波頂部からなる緩い波状口縁を呈し、胴が幾分すぼまり気味の深鉢で、口径23.6cm、現器高20.8cmを測る。文様は、加曾利E IV式とは異なり横位に文様展開をもつもので、口縁部に無文帯をおいてやや太目の沈線で区画する4段の帯状繩文を胴上半部に施文している。このやや太目の沈線で区画した帯状繩文間に上段に連続位置が重複しないように交互に接続させ、晚期後後にみられる変形工字状文に似たモティーフをもたせているものである。地文はみられず、胎土には微砂を含んでいたが焼成は堅牢である。また29・31・36は、繩文地の上に太目の沈線でJ字状やX字状、あるいは鉛状のモティーフ文を描き、その中を磨消しているものであり、のこる30・32~35は地文をもたずに太目の沈線によるJ字状・X字状、それに鉛状などの区画に繩文を充填したものである。なお出土したこの種土器群は、称名寺式の中でもここに図示したようなわゆる磨消繩文を主体としたものが大半を占めており、沈線区画内に刺突列点を施している資料は僅かなものであった。

2と37~51までは堀之内I式である。そのうち2は、6D-87グリッドIV層から出土した資料で平口縁の浅鉢である。口径21.0cm、器高11.2cmを測る。文様は口縁内側に1条の浅い沈線を巡らし器一面にL R 捨りの斜繩文を施しているもので、胴下半は無文である。なお内面は横方向に磨き整形が行なわれている。胎土は緻密で焼成は堅牢である。また37~41は繩文地の上に沈線で文様の描かれているものである。37・38は沈線を垂下させたもので37の繩文は粗い。



第13図 グリッド出土土器 (4)

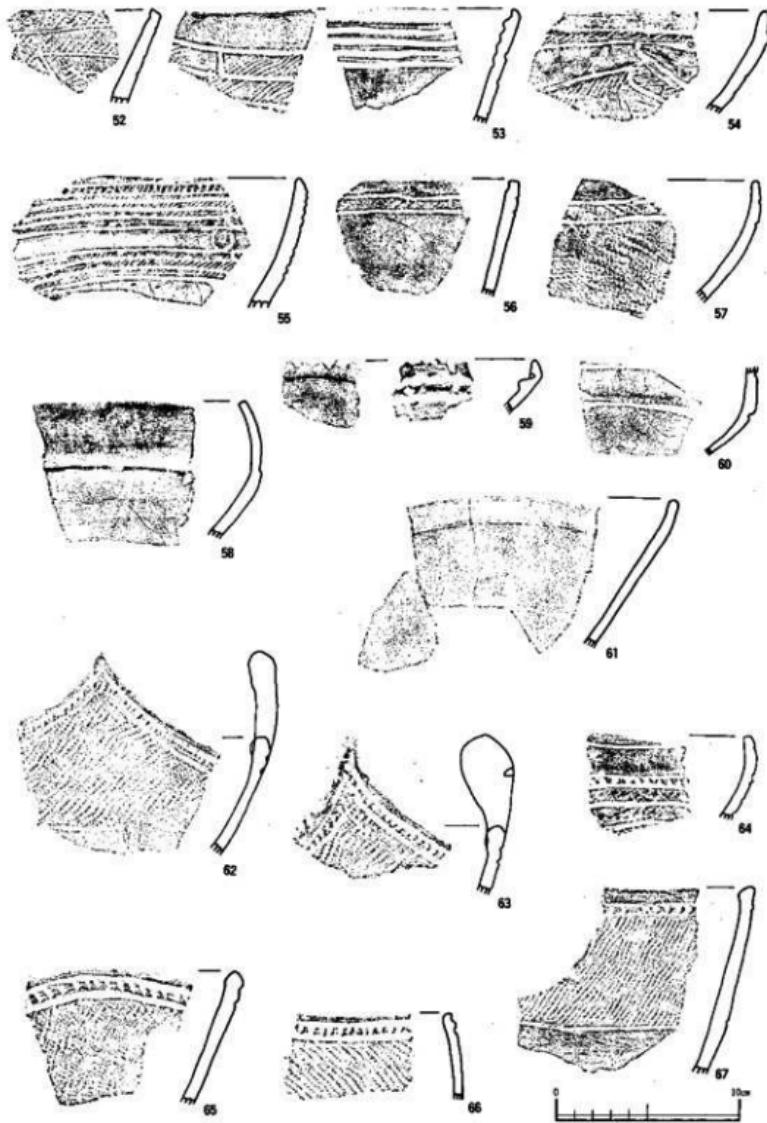


第14図 グリッド出土土器 (5)

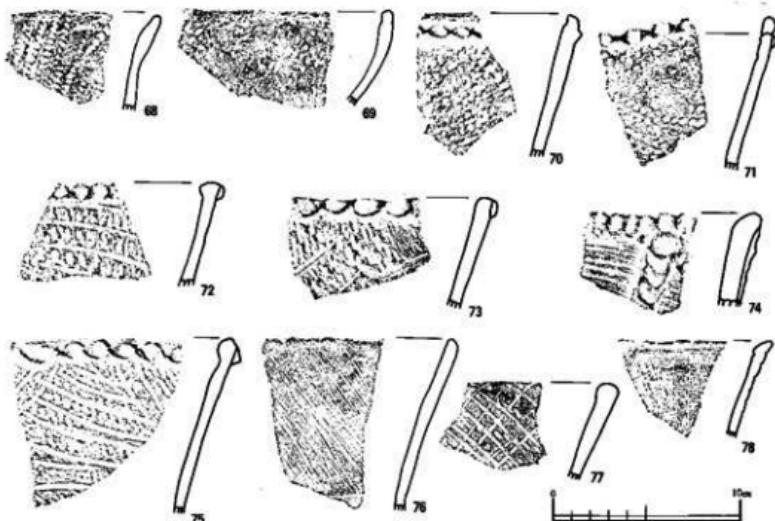
39は、口縁に円形刺突をもつ小波状を有し、口辺を巡る2条の沈線と波頂部から懸垂する沈線と波状線とでモティーフ文を描出している。40・41は曲線的・直線的に沈線が施されモティーフ文が描かれるものであり、41は波状に作りだされた口縁と波頂部から垂下する粘土紐が貼りつけられその上に角の丸いヘラ状工具の刻みが付されている。42~45は器面に繩文のみを施しているグループである。42は口縁に沿って1条の沈線を巡らしており、45は無節の斜縄文が施されている。また46・47は掃齒状工具を使って縱走する条線を施文しているものである。いずれも平口縁の深鉢であり、47は口縁部に無文帯を残している。48・49は半截竹管を用いて直線ないし弧状に施している。50・51は注口土器の注口部である。いずれも注ぎ口のみで全体はわからないが、堀ノ内I式に特徴的な円形押圧文を口縁波頂部および注口部に配しており、51ではその波頂部が橋状の把手になっている。

第4群 後期中葉の土器群 (第10図3・4 第15・16図)

後期中葉加曾利B式を本群土器とした。全体の中で量的には20%余を占めている。器形のわかる資料は2点のみで他はすべて破片である。これらのうち精製土器は3・4および52~67ま

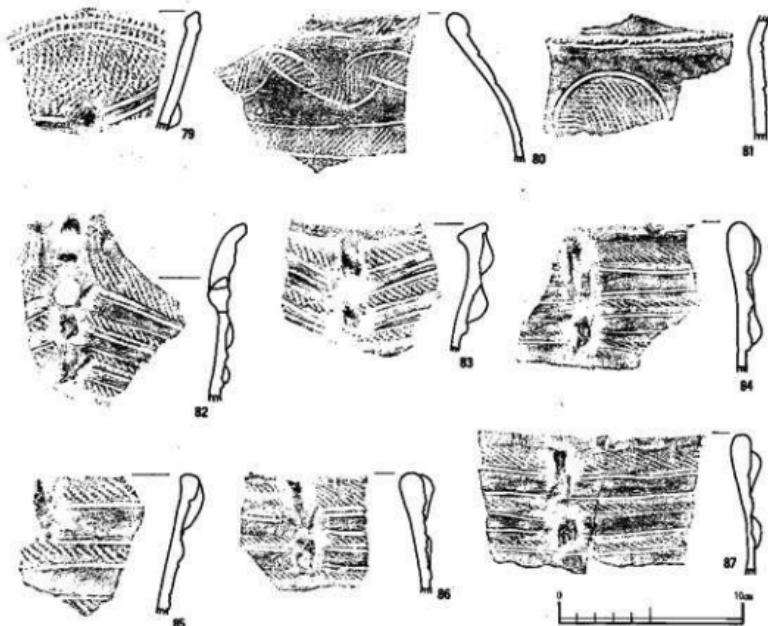


第15図 グリッド出土土器 (6)



第16図 グリッド出土土器(7)

でを図示した。3と52~57はその中でも古い段階に位置づけられる資料で、文様として磨消繩文を充填した平行横線文を基調とし、この横線間に縦線や鉤状の弧線で区切る手法がみられるもので、中には器内面の口縁に沿って1~数条の沈線を巡らすものがある。3は6E-5グリッドⅢ層から出土した平口縁の浅鉢で、口径12.0cm、器高6.5cmを測る資料である。文様は口縁外周に2段の平行横線文が巡り、その間を中に刺突のある円形文で3ヶ所接続させている。またこの横線文および円形文の中には繩文を充填している。これらは加曾利BⅠ式と考えられるものである。また4・58~61は加曾利BⅡ式である。4は6D-96グリッドのⅢ層中から出土した小型の台付注口土器で、高台部は欠損しているものの上半の原形がわかる資料である。口縁は垂直に立ち上がり、胴部がソロバン玉状を呈してその下の台部と接続しているもので、口径5.0cm、現器高7.0cmを測る。胴上半の注口部は口径1.6cm、長さ1.0cm余と注口丈は短い。文様は胴上半が繩文地の上に横位と流水状に沈線を配し、その間に磨消し手法がみられ、下半はヘラ条線文を施している。なお胴の流水状沈線間に刺突をもつ縦位沈線で区画している。58~61は本群に特徴的な浅鉢で、肩部を微稜や沈線で形づくるものである。62~67は加曾利BⅢ式と考えられるグループである。波状ないし平口縁をもつ深鉢で、繩文地の上に口縁に沿って刻み目のある沈線を施し、胴部には横走沈線・弧状沈線などを配してその間を磨消したものである。第16図に図示した資料は、本群の粗製土器である。そのほとんどは口縁の外反する深鉢で、繩文地のもの(68・69)のほか、地文に繩文を施し口縁に沿って指頭圧痕ある粘土紐



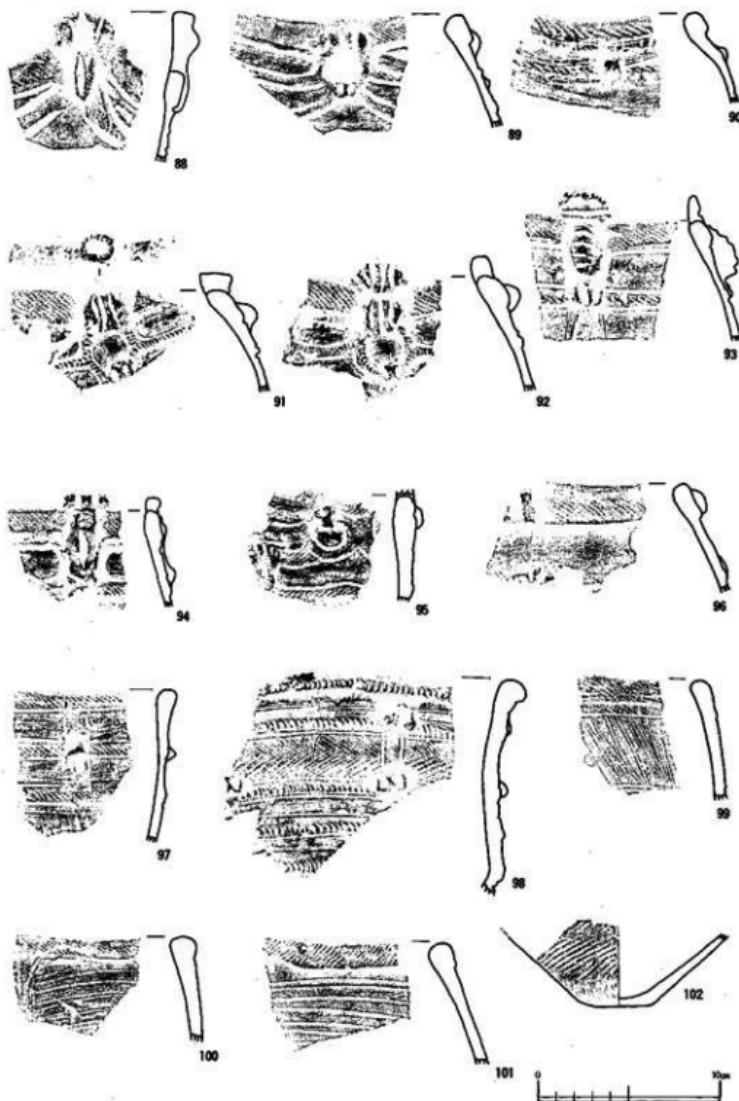
第17図 グリッド出土土器（8）

を周回させたり、器面縄文の上に斜行する太めの条線を施している（70～75）もの、地文をもたずに口縁から胴部にかけて条線を斜行してあるいは格子状に施すもの（76～78）などがある。

第5群 後期後半の土器群（第17～19図）

曾谷・安行1・2式を本群としている。調査で出土した土器群中最も多数を占めているグループであるが、器形を復元できる資料はなくすべて破片である。比率的には曾谷式は小量出土したのみでその多くは安行1・2式土器によって占められている。図示した曾谷式土器は3点である。いずれも精製土器の範疇に含まれるもので、79は地文縄文の上に口縁に沿って2条の沈線を巡らしその間に刻みを付して、胴上半の平行沈線上に貼り瘤を施すものであり、80は内湾する壺の口縁と胴部に磨消縄文による区画帯を設け、その間の無文帯部に上下の入り組み弧線を配し磨消縄文で充填している。81は弧線の磨消をもつ胴下半の資料である。

82～87および103～108は安行1式に属するグループである。前者は帶縄文系の精製土器で82・83は波状口縁をもち、後は平口縁である。いずれも横走する平行線で区画された帶縄文の幅は広く、綫長の瘤を貼付している。103～109は紐縄文系でいわゆる粗製土器とされるものであ



第18図 グリッド出土土器 (9)

る。形状は外反する深鉢形を呈し、加曾利B式にみられるような地文繩文はもたず、条線を斜行ないし縱走させて施している。106～109は口縁に沿って沈線ないし粘土紐の上に刺突を付している。

また安行2式は、88～102と110～116までの資料である。1式の場合と同様、帯繩文系と紐繩文系の土器に分けられる。帯繩文系の土器は波状口縁と平口縁の両者があり、両者とも口縁部上に好んで山状や扇状の突起をつけ、その下の帯繩文間に截痕のある縱長ないし横長の瘤を貼付したり、小型の瘤を併用することによって区画している。中には帯繩文帯を繩文にかえて刻みを付したり(91・92)するものもあり、帯繩文は波状口縁の口縁直下で三角状に区画されたり、繩文間に窓枠状の沈線区画を施すものもみられる。なお97・98は台付鉢形土器と考えられるものである。口縁はほぼ垂直の立ち上がりをもち、横走する文様帯が特徴的である。次に紐繩文系土器であるが、いずれも内傾する深鉢で斜行する条線を器面に施しておらず、口縁と胴部に爪形圧痕を付した粘土紐を貼付している。117の資料は、同時期の製塩土器の破片である。器面を縦位に削り内器面は横走する磨き痕がみられる。出土量は少なく僅かなもので全体の様相は不明である。

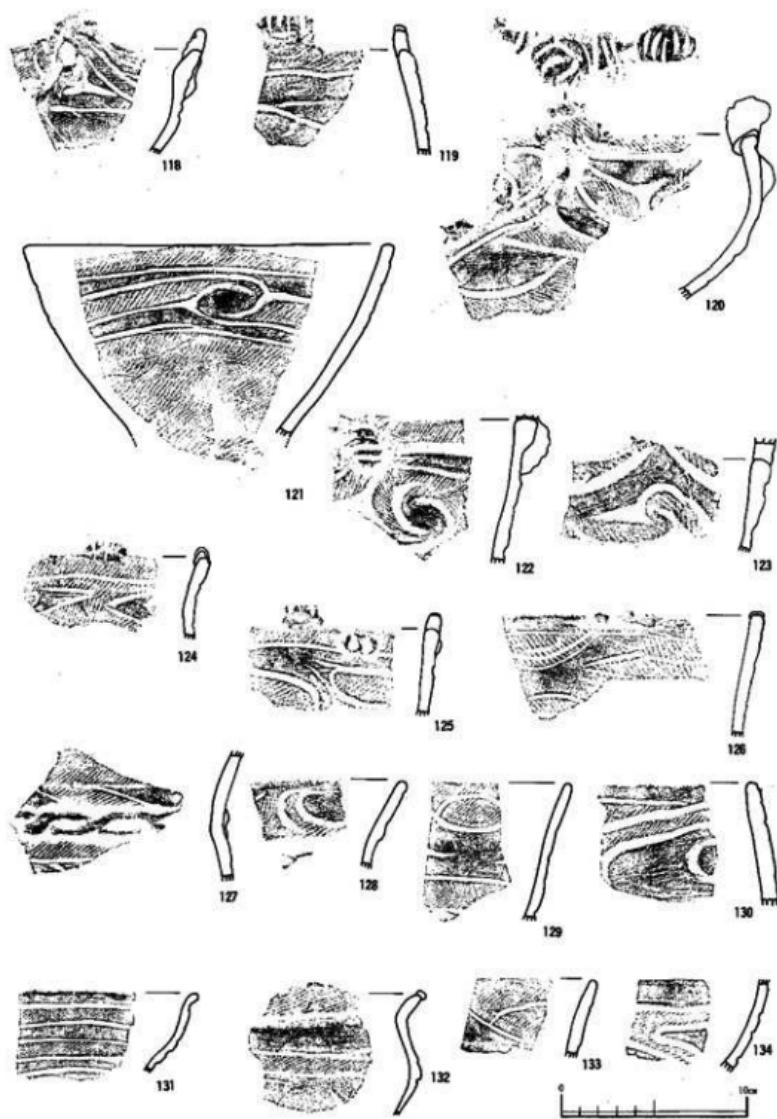
第6群 晩期前半の土器群（第10図5・第20～22図）

安行3a・3b式および姥山II・III式など晩期前半期に位置づけられる土器を本群とした。量的には、胴部破片が第5群のものと判別するのが困難なために全体の占める比率は明らかではないが、口縁部で300点余を数えることから少ないものではないと考えられる。なお器形のわかるものが1個体ある。安行3a式の精製土器としたものは、5と118～127である。5は17トレンチⅢ層下部の道状遺構確認面で出土した皿形土器で、1/2余が残存し原形のわかる資料である。口径18.8cm、器高5.0cmを測る。文様は、口縁にいわゆるB突起を連続的に巡らし、器面直下に沈線で画した繩文帯をもつ。同下半から底部にかけては三叉文を組み合わせてモティーフ文を描出している。そのほか波頂突起のある波状の口縁で口縁直下に刺突の玉抱き三叉文を施文するもの(118)や口縁に付した山状突起から胴央にかけて垂下し、周回する突起文を軸に胴上を三叉文、下半を弧線文で飾ったりするもの(120)、直線的に三叉文を組み合わせるもの(121)、三叉文と弧線を組み合わせるもの(122・123)、弧線と突起文を組み合わせるもの(125～127)などこの種土器には、三叉文を基調とした各種の文様モティーフがみられる。粗製土器は152～157が該当する。いずれも深鉢で、条線文をもち口縁と胴部に周回させた紐繩文を縱走する沈線で区画している。128～134は安行3b式としてまとめた資料である。器形は小型の鉢か浅い碗とみられ、平口縁のものが目立つ。文様は二重の弧線や直線を用いて三叉文と組み合わせたり、繩文充填の連弧線文を施したりしているもので、中には131にみられるような直線的三叉文をもつものもある。

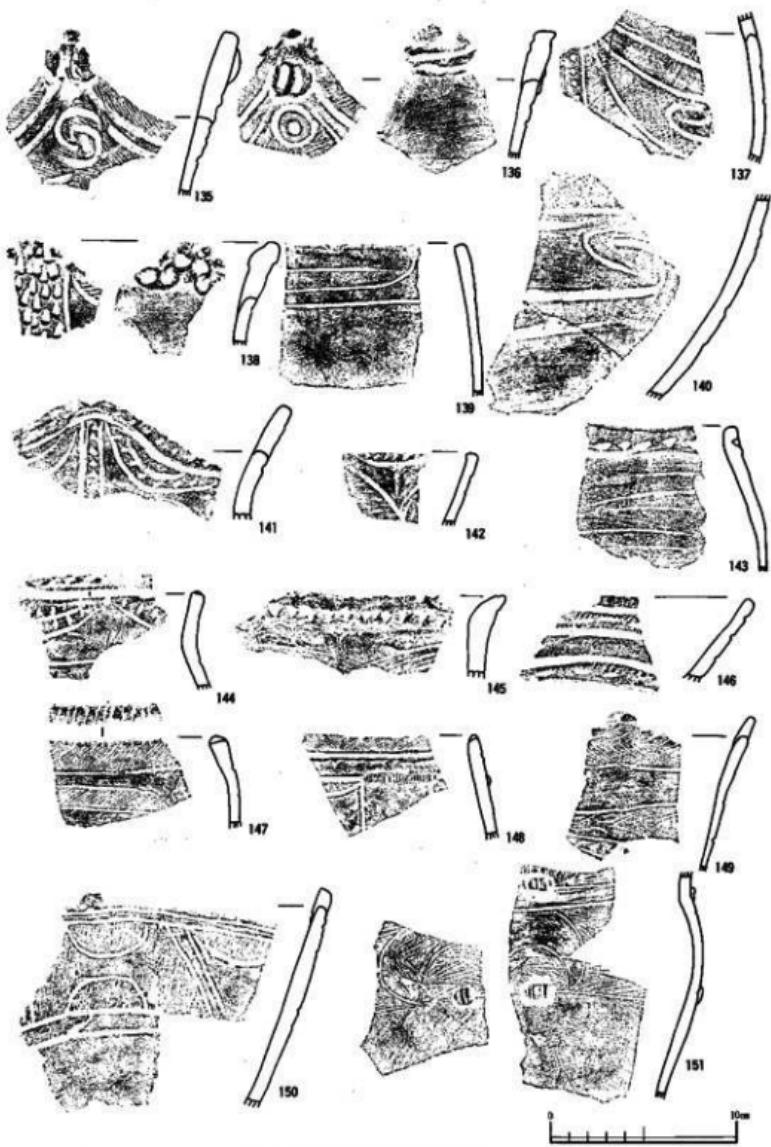


第19図 グリッド出土土器 (10)

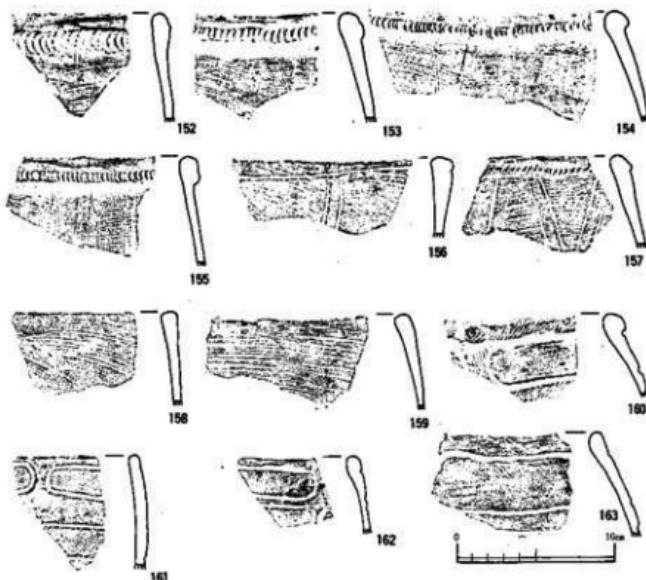
135～163までは姥山Ⅱ・Ⅲ式の範疇に含まれるグループである。このうち 135・136および 158～161は姥山Ⅱ式の精製と粗製土器とされるもので、135・136はともに深鉢形土器で口縁の波頂部に粘土絞を鉢巻き状に配し、口縁部に沿って幅1cm前後の繩文帯を巡らす。波頂部下は沈線で区画した菱形磨消文を施し、この中に玉抱き弧線文(135)や円圈文(136)を充填している。粗製土器は条線文を施すものと太めの沈線で枠状区画をした磨消繩文をもつものとがあり、いずれも深鉢形を呈している。また 137・138、それに 162・163は姥山Ⅲ式である。137・138は波状口縁の深鉢形を呈する精製土器で、Ⅱ式に類する様相がみられるが、波頂部下の菱形区画の中に弧線や円圈文にかえて新たに列点刺突文を施している。しかも 138の



第20図 グリッド出土土器 (11)



第21図 グリッド出土土器 (12)



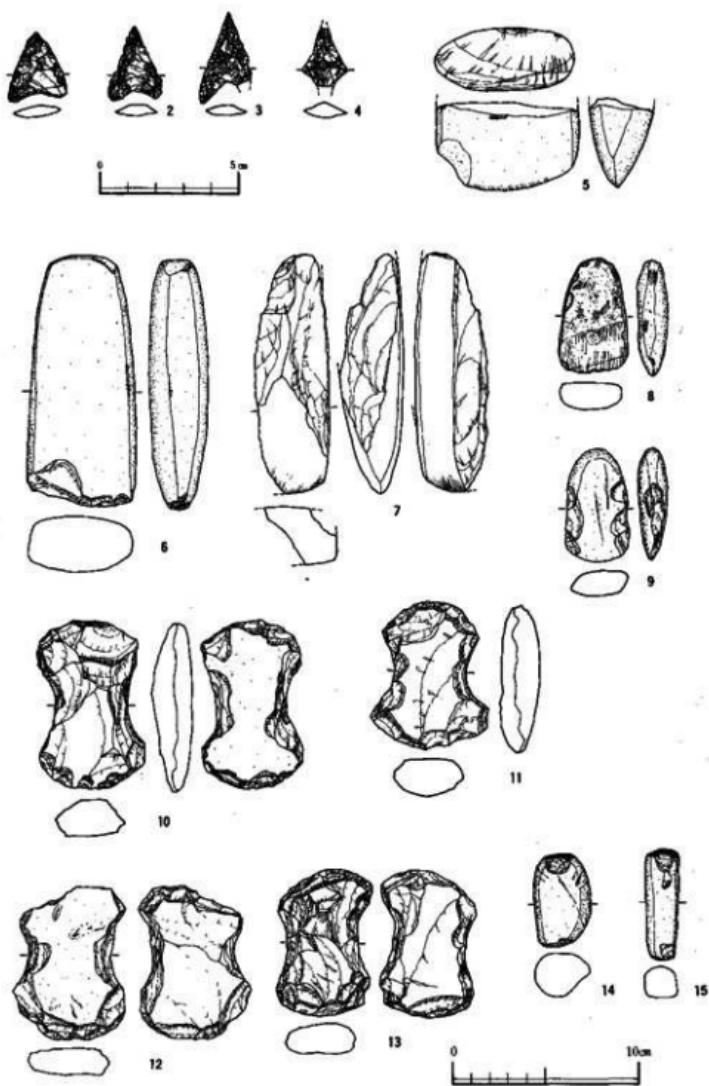
第22図 グリッド出土土器 (13)

の資料にみられるように波頂部に鉢巻き状に貼付した粘土紐にもこの刺突は押圧される。粗製土器としては 162・163 の 2 例を図示した。いずれも内傾する深鉢で、文様は太めの沈線による枠状区画文である。

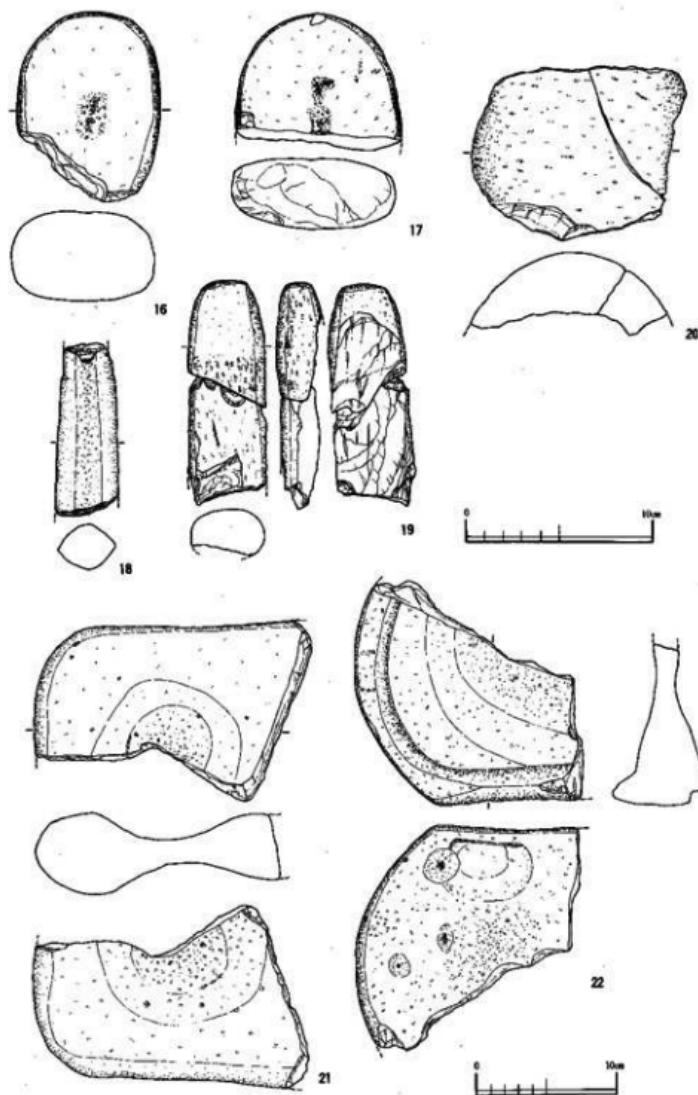
147～151は半精製の深鉢形土器で、口唇部上と器面に巡らせた平行線・弧線の中に細密沈線や矢羽状沈線を充填したものである。このうち 151は截痕のある小型の瘤を貼付している資料であり時期を考える上に示唆を与えるものと考えられ、これら細密沈線をもつ半精製の土器は時期的には姥山Ⅱ・Ⅲ式の範疇に含めて理解したいが、多少時期をさかのばるものもあるかもしれない。なお 141～146の土器については、後続する安行Ⅲc式の中に含める意見もあるが、今回の調査では明確な安行Ⅲc式土器を確認することができなかったことから、ここでは姥山Ⅲ式に属す半精製のグループのものと認識しておく。

石器・土製品・石製品

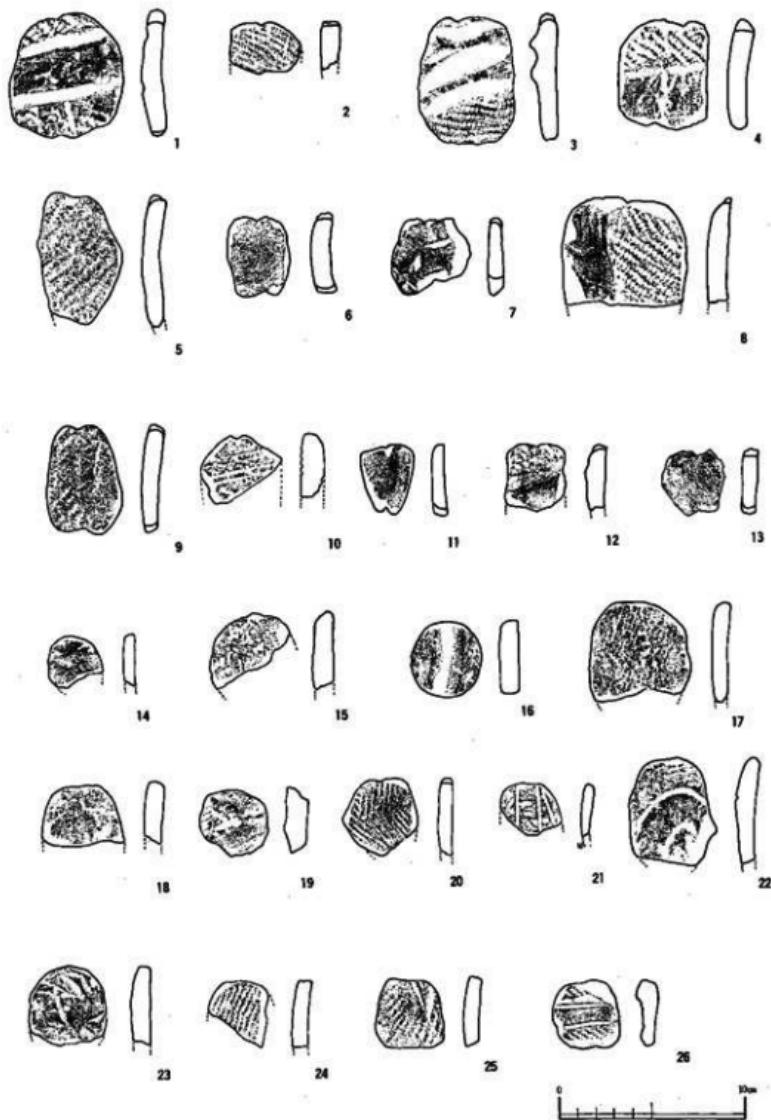
今回の調査で出土した土器以外の遺物としては、石器をはじめ土製品・石製品などがある。このうち石器は、石鎌・石斧など利器と石皿・磨石などの調理具のほか信仰的な意味合いをもつと考えられる石剣・石棒の類が出土しているのが目を引く。出土傾向としては、IV層ないし



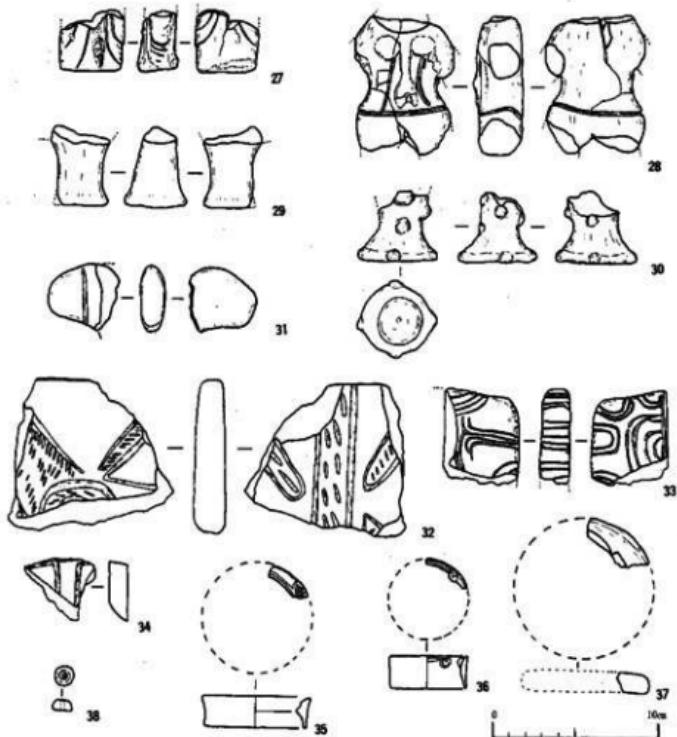
第23図 出土石器実測図（1）



第24図 出土石器実測図（2）



第25図 出土土製品・石製品実測図（1）



第26図 出土土製品・石製品実測図（2）

中期末から後期前半期の土器群の伴って出土したものが多い。石鎌は4点出土したが、内1点は有茎である。磨製石斧は定角式がほとんどで、大小がある。また打製石斧は分胴形を呈しており後期前半に位置づけられるものである。石劍は両刃の柄部に近い部位で刃部との境にくぎれをもつ。石棒は大小があり、19の資料は50m余離れた地点から出土したものが接合した。石皿は2点出土しており堀之内期のものと考えられるが、22は有脚の石皿と思われる。

土製品は、土器片錐と土製円盤とが大部分を占めている。これらは時期的に中期末から後期後半期に属しているものがあり、大半は胴部破片の周縁を磨いたり、打ち欠いたりして作ったものである。このうち22の資料は、後期前半称名寺式の破片を使用して周縁を入念に磨いて作った土製円盤で、本遺跡では稀少性がある。

土偶は図示した4点が出土している。完全品はなくいずれも破片である。27の資料は、6E-41グリッドで確認した中期末と考えられる住居覆土から出土したもので、下半身とみられる部分である。未だ両脚の分離はみられず扁平な作りであるが、表現文様は正面中央に中期末の文様技法に特徴的な微隆起帯が垂下し、その左右から裏面にかけて2条の沈線が弧状に巡らされている。また28は頭部・両手足を欠損した胴体部分である。両乳房も剥落している。文様は正面に逆Y字形の粘土紐を垂下させ、左右に1条ずつの弧線と腰部に1条の沈線とを周回させており、裏面文様はみられない。山形土偶であろう。29・30は脚部である。29は整形痕があるものの文様表現はない。また30は瘤状突起を正面をはじめ裏面・側面それに足の周囲に貼付しており、脚裏を中空にしているものである。31は岩偶と考えられるものである。部位は腕部と思われるが定かではない。軟質の石材を用い、一面に線刻をするものである。土版は3点出土している。いずれも晩期前半に位置づけられると考えられるもので、破片である。沈線間に列点刺突を充填するものや三叉文と弧状線とを入組ませて施文したもののがみられる。その他環状の耳飾や紡錘車形土製品などがあり、時期的には晩期前半の遺物と考えられるが、いずれも細片のため詳細は不明である。なお38は滑石製の白玉で両側から穿孔しているものである。

第1表 園生貝塚出土石器計測表

番号	種別	出土地點	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
1	石 繩	6D-92 IV層	24.1	21.4	3.9	1.6	黒曜石	
2	石 繩	7E-67 III層	26.3	18.8	3.9	1.3	黒曜石	
3	石 繩	5C-9 IV層	32.3	(19.0)	4.5	1.7	チャート	
4	石 繩	4F-43 III層	(22.0)	16.9	6.9	(1.5)	チャート	有茎繩
5	磨製石斧	4E-5 III層	(48.0)	76.2	34.1	(158.1)	流紋岩	定角式?
6	磨製石斧	5C-56 IV層	134.3	58.9	20.4	402.9	砂岩	定角式
7	磨製石斧	6C-41 IV層	61.0	37.0	15.0	54.7	蛇紋岩	定角式
8	磨製石斧	4F-41 III層	(127.2)	(40.0)	(34.2)	(173.3)	砂岩	定角式
9	石 斧	4G-21 IV層	59.8	34.2	14.3	37.6	安山岩	磨製?
10	打製石斧	7E-32 IV層	89.7	56.0	22.6	123.8	粘板岩	分側形
11	打製石斧	5D-14 III層	77.8	62.7	21.9	111.5	砂岩	分側形
12	打製石斧	6D-65 IV層	81.4	59.2	15.2	92.5	粘板岩	分側形
13	打製石斧	3トレンチIV層	77.6	49.6	16.9	92.3	粘板岩	分側形 研磨痕有り
14	叩き石	4E-30 IV層	49.7	30.2	24.0	48.6	砂岩	小型棒状
15	叩き石	5C-63 IV層	59.3	18.0	16.1	30.0	粘板岩	小型棒状
16	磨石	6E-1 IV層	(98.8)	75.1	49.2	(590.3)	安山岩	
17	磨石	6E-7 III層	(70.9)	86.4	37.5	(336.1)	安山岩	
18	石 刺	4F-21 III層	(90.4)	34.2	24.8	(122.3)	緑泥片岩	
19	石 棒	5C-87 IV層	(120.0)	40.2	(21.6)	(151.1)	緑泥片岩	別地点接合
20	石 棒	地點不明	(91.9)	(116.6)	(32.9)	(505.7)	安山岩	推定直徑13cm
21	石 球	6D-65 IV層	(197.2)	(127.4)	50.5	(1892.3)	花崗岩	
22	石 球	4G-63住土	(156.8)	(162.2)	66.9	(1088.0)	安山岩	有脚

第2表 出土土製品・石製品計測表

番号	種 別	出 土 地 点	長径(mm)	短径(mm)	厚さ(mm)	重 量(g)	残存度	備 考
1	土器片 鍋	5 C - 9 Ⅳ層	64.5	60.5	10.0	52.9	完 形	中期末胴部 周縁磨き
2	土器片 鍋	5 C - 9 Ⅴ層	—	39.0	11.5 (13.3)	1 / 3	瓶之内 I 式胴部 周縁磨き	
3	土器片 鍋	5 C - 27 Ⅳ層	67.0	53.5	11.5	64.4	完 形	中期末胴部 周縁磨き
4	土器片 鍋	5 C - 27 Ⅳ層	57.0	48.5	12.0	48.3	完 形	中期末胴部 周縁磨き
5	土器片 鍋	5 C - 65 Ⅳ層	69.5	45.0	10.0	40.9	完 形	中期末胴部 周縁磨き
6	土器片 鍋	5 C - 98 Ⅳ層	42.5	33.5	11.0	21.9	完 形	場之内 I 式胴部
7	土器片 鍋	5 D - 27 Ⅳ層	—	40.0	8.5 (17.0)	2 / 3	瓶之内 I 式胴部	
8	上唇片 鍋	6 C - 23 Ⅳ層	—	67.0	9.5 (59.6)	1 / 2	中期末胴部	
9	土器片 鍋	6 C - 81 Ⅳ層	58.0	40.0	10.5	30.4	完 形	中期末胴部 周縁磨き
10	土器片 鍋	6 E - 1 Ⅳ層	—	41.0	15.5 (18.7)	1 / 2	瓶之内 I 式胴部 周縁磨き	
11	土器片 鍋	6 E - 5 Ⅳ層	37.5	28.5	9.5	10.6	完 形	場之内 I 式胴部
12	土器片 鍋	6 E - 27 Ⅳ層	—	—	9.5 (16.2)	2 / 3	中期末胴部	
13	土器片 鍋	地 点 不 明	35.0	34.5	11.0	14.9	完 形	瓶之内 I 式胴部
14	土製円盤	5 G - 41 Ⅳ層	—	29.0	8.0 (6.2)	1 / 2	場之内 I 式胴部 周縁割り	
15	土製円盤	6 C - 81 Ⅳ層	—	14.9	11.5 (15.9)	1 / 3	場之内 I 式胴部 周縁磨き	
16	土製円盤	6 D - 41 住覆土	40.5	39.0	8.0	16.8	完 形	中期末胴部 周縁磨き
17	土製円盤	6 D - 72 Ⅳ層	—	53.5	10.5 (37.0)	1 / 2	中期末胴部 周縁磨き	
18	土製円盤	6 D - 81 Ⅳ層	—	44.0	11.5 (18.5)	1 / 2	中期末胴部 周縁磨き	
19	土製円盤	6 D - 92 Ⅳ層	37.5	35.5	14.5	17.6	完 形	中期末胴部 周縁割り
20	土製円盤	6 D - 92 Ⅳ層	—	38.0	6.5 (12.7)	3 / 4	加曾利B式胴部 周縁割り	
21	土製円盤	6 E - 1 Ⅳ層	—	27.5	6.5 (5.4)	1 / 2	加曾利B式胴部 周縁割り	
22	土製円盤	6 E - 4 - 14 Ⅳ層	—	46.0	11.5 (31.9)	2 / 3	名寺式胴部 周縁磨き	
23	土製円盤	17トレンチⅣ層	—	40.5	11.0 (24.5)	2 / 3	瓶之内 I 式胴部 周縁割り	
24	土製円盤	17トレンチⅣ層	—	—	9.0 (10.3)	1 / 3	瓶之内 I 式胴部 周縁割り	
25	土製円盤	18トレンチⅣ層	38.0	37.5	8.0	14.3	完 形	加曾利B式胴部 周縁割り
26	土製円盤	18トレンチⅣ層	37.5	36.5	8.5	17.7	完 形	安行 I 式胴部 周縁割り
27	土 偶	6 D - 41 住覆土	—	—	—	—	下半身	中期末 微型起線 弧状沈線
28	土 偶	6 D - 81 Ⅳ層	—	—	—	—	頭	加曾利B式 腹部起線 弧状
29	土 偶	5 D - 29 Ⅳ層	—	—	—	—	脚	
30	土 偶	6 D - 92 Ⅳ層	—	—	—	—	脚	瘤状の突起貼り付け
31	岩 偶	4 F - 65 Ⅳ層	—	—	—	—	腕?	線刻1条
32	土 版	4 E - 30 Ⅳ層	—	—	21.0	—	1 / 3	安行3 c式? 沈線開列点文
33	土 版	5 G - 23 Ⅳ層	—	—	18.0	—	1 / 4	安行3 b式? 弧状沈線文
34	土 版	6 D - 92 Ⅳ層	—	—	—	—	—	安行3 a式? 太い沈線文
35	土製耳飾	6 D - 81 Ⅳ層	—	—	4.0	—	1 / 6	晚期前半期 $\phi 66.0\text{mm}$
36	土製耳飾	6 D - 81 Ⅳ層	—	—	8.0	—	1 / 6	晚期前半期 $\phi 48.0\text{mm}$
37	土製結婚車	4 E - 30 Ⅳ層	—	—	—	—	—	$\phi 52.0\text{mm}$
38	白 玉	6 D - 81 Ⅳ層	—	—	—	—	完 形	両側穿孔 $\phi 11.0\text{mm}$

VI. まとめ

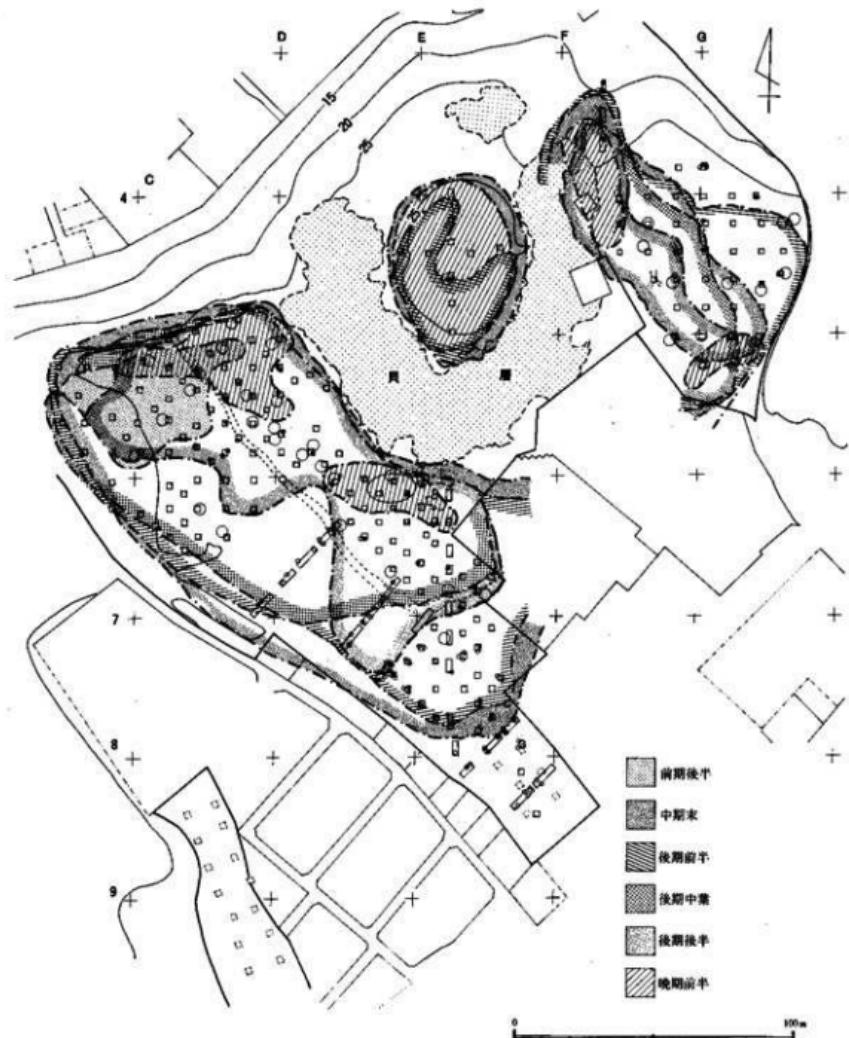
園生貝塚の今回の調査は、周辺部を含めた貝塚遺跡を保護していくために遺跡の規模・性格等の基礎資料を得ることを目的に行った調査である。調査は昭和63年度と平成元年度の2ヶ年に分け、地形測量調査と発掘調査（確認調査）とを実施した。

今回の発掘調査では、確認調査ということから貝層部分はあらかじめ除外し、貝塚の内側と周辺区域を調査対象として調査をした。調査の結果、周辺区域からは縄文中期末から晩期前半にかけての住居跡をはじめとする多くの遺構が、土器・石器などの豊富な遺物とともに確認され、これによって概ね貝塚を伴う集落遺跡としての「園生貝塚」の、性格の一部を明らかにすることことができたものと考えられる。そこでこれら確認された遺構・遺物を基に、本遺跡の縄文時代について概要を整理しておくことにする。

まず遺構としては、古墳時代の住居跡1軒と中世の溝、それに時期不明（近世以降か？）の土壤を除くとすべて縄文時代の遺構で占められている。時期的には縄文中期末から晩期前半に属すと考えられるもので、住居跡38軒、土壤51基、溝5条、道状遺構1状、貝層9ヶ所、それに土器捨て場1ヶ所等の遺構群からなる。これらの遺構は、時期的に後期前半以前のものと後期中葉以後の遺構確認面が異なり、時期的な違いをもつ遺物包含層（Ⅲ層—加曾利B式以降の包含層、Ⅳ層—塙之内式以前の包含層）の堆積と密接な係わりあいが考えられる。

これらの遺構のうち住居跡は、貝塚を中心として周縁に広く分布しており、貝塚内側での確認は1軒にとどまっている。この事実は調査区設定の多寡が原因とばかりは考えられず、多くの大型貝塚や集落跡でみられる集落構造と同様、共同体としての集落ゾーンの中でその中央に広場的色彩をもつ空間域を作り、それを中心に環状ないし弧状の住居エリアを展開していくという集落構造を、奇しくも裏付けたものとも考えられ、爾後の検討課題である。なお調査で確認した住居跡は時期毎にまとまりのある分布がみられる。すなわち中期末加曾利E式期のものは貝塚西南側の比較的離れた部分に展開し、後続する後期前半塙之内式期のものは、貝塚東側の台地平坦部を中心に集中している。また後期中葉期のものははっきりしないものの、後期後半以降晩期に属すものは各地点とも貝塚外側の縁辺部に確認されている。この傾向は、概ね土器を主とする出土した遺物の分布状況からも明白につかみ取ることができるものであり、時期毎の住居の展開と該期の遺物の分布は概ね合致している。

土壤は、51基の存在が確認されている。このうち7D-85グリッド検出の土壤は、先述したように埋設土器が露出していたためやむ無く発掘をしたところであるが、この観察では本遺跡のような集落遺跡内に所在している土壤は必ずしもいわゆる陥穴とされるような大型で深さの



第27図 遺物分布傾向図

ある土壤ばかりではなく、皿状ないし小型で貯蔵用とか埋葬用などの機能をもつ土壙が主体的に設けられていたものと考えられる。

また調査区北側の斜面で確認した道状遺構は、Ⅲ層下部とⅣ層上部の境で検出したことは、先述したところであるが、この道状遺構は、台地上の集落と谷底（湧水池など）とを結ぶ通路

と考えられるもので、他の遺跡でも最近その所在が注意されているものである。時期的には本遺跡の場合、確認した道状遺構の脇から晩期前半安行3a式に属す皿形土器（第10図5）が出土していることから、該期の遺構と認められる。

次に土器捨て場遺構であるが、後晩期の遺跡でよくみられるいわゆる土器塚ともいわれているものである。貝塚に南接した後期後半から晩期前半期の包含層中で検出している。堆積は20cm余を測るもので、密度濃く重疊した状態で発見され、堆積の中には土器のほか土偶・土版・耳飾・白玉などの遺物が含まれていた。その拡がりは、3ヶ所のグリッドだけに確認されていてことからそれほど広いものとは考えられず約15m余のものであろう。

なお貝層については、今回の調査では確認のみにとどめるというたてまえから、実質的に発掘を控えたために時期的な堆積層序を確かめることはできなかったが、先の千葉大学の調査などからすると、概ね貝塚の形成は、後期前半の堀之内I式期から晩期前半の時期にかけて行われたものと考えられる。これは重要なことで、このことが事実だとすると、今回の調査で確認した遺構・遺物のうち、貝塚を営んでいた時期のものは後期前半から晩期前半期までということになり、それ以前の時期、すなわち新たに発見された前期後半期と台地上のほぼ全城に展開がみられた中期末の時期には、本遺跡で貝塚は作られていないかったということで、遺跡形成の過程に一つの問題を提起するものと思われる。

次に出土遺物についてであるが、第27図は本遺跡から出土した遺物の分布を時期毎にあらわしたものである。この中で、本遺跡から新たに発見された前期後半期の遺物は、図示したことなく貝塚の西側に並ぶ台地緩斜面に分布しているのがみられる。今回の調査では、この時期の住居跡などの遺構を検出することはできなかったが、遺物の出土状況とも考えあわせて、本遺跡ではこの区域に該期の生活エリアがあるものと考えられる。

また中期末および後期前半の遺物は、遺構の展開を裏付けるかのように貝塚の外縁部を弧状に分布する傾向がみられる。この傾向は、一人園生貝塚ばかりの傾向ではなく、千葉市桜木町所在の加曾利貝塚の南側貝層の外縁においても、以前の調査で同じ時期の遺構・遺物に同様の傾向が認められており、大型貝塚の外縁部における遺構・遺物の在り方に一つの示唆を与えるものと思われる。

後期中業の遺物は、広い範囲に分布を認めることができるが明確な遺構は少なく、その内容は不明な部分がある。

もっとも出土量の多かった後期後半から晩期の遺物は、他の時期の遺物分布と比べると台地上平坦面の比較的狭い範囲に集中して分布している。特に貝塚内側には濃密に分布しており、貝塚内で確認した遺構との係わりを考えると興味がもたれる。

以上、大まかに今回の調査について述べてきたが、今まで園生貝塚に関するまとまった資

料がなかったことから考えると、今回の調査はそれを補うものとして大事な成果と思われ、報告ではできるだけ遺物などの資料を多く掲載するように努めた。

以下に園生貝塚の現在までの報告文献を掲載しておく。

報告文献

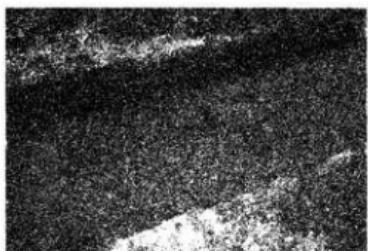
- 加部巖大 「古器物見聞之記」 好古雑誌1 明治14年
大野雲外 「園生貝塚に就いて」 人類学雑誌22-249 明治39年
松永千里 「下総国園生貝塚出土の裝身具」 考古学集刊 第2晩 昭和24年
西村正衛 「千葉県都賀村園生貝塚」 日本考古学年報1 昭和26年
神尾明正 「千葉市園生貝塚1952年トレンチ発掘略報」 昭和27年
神尾明正 「園生貝塚」(第3報) 日本考古学協会発表要旨12 昭和28年
神尾明正 「園生貝塚」 昭和29年
神尾明正 「千葉県園生貝塚1954年トレンチ」 日本考古学協会発表要旨14 昭和29年
神尾明正 「園生貝塚」 千葉大学文理学部人文地理教室、地質学教室 昭和29年
神尾明正 「園生貝塚1954年トレンチについて」 千葉大文理学部紀要1-4 昭和30年
神尾明正 「園生貝塚1955年トレンチ発掘略報」 昭和31年
神尾明正 「園生貝塚1956年トレンチ発掘略報」 昭和31年
神尾明正 「千葉県千葉市長者山貝塚」 日本考古学年報5 昭和32年
神尾明正 「千葉県千葉市園生貝塚」 日本考古学年報7 昭和33年
神尾明正 「園生貝塚の発掘による地形面と考察」 千葉大文理学部紀要4-1 昭和36
神尾明正 「千葉県千葉市園生貝塚」 日本考古学年報10 昭和38年
神尾明正 「千葉県千葉市園生貝塚」 日本考古学年報12 昭和39年



1. 國生貝塚全景（南方向から）



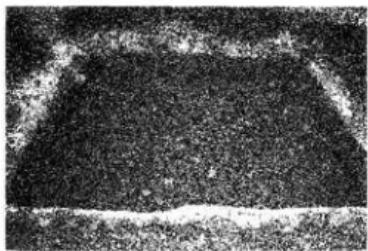
2. 國生貝塚全景（西方向から）



3. 住居跡検出状況



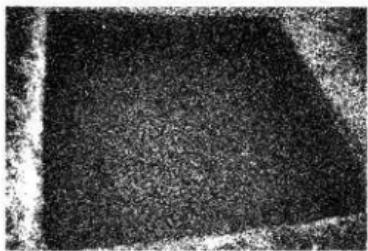
4. 第1号土壤遺物出土状況



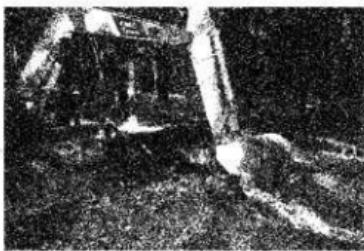
5. 土器捨て場堆積状況



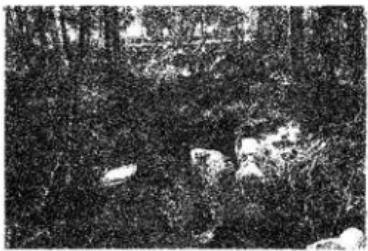
6. 道状遺構検出状況



7. グリッド遺物出土状況



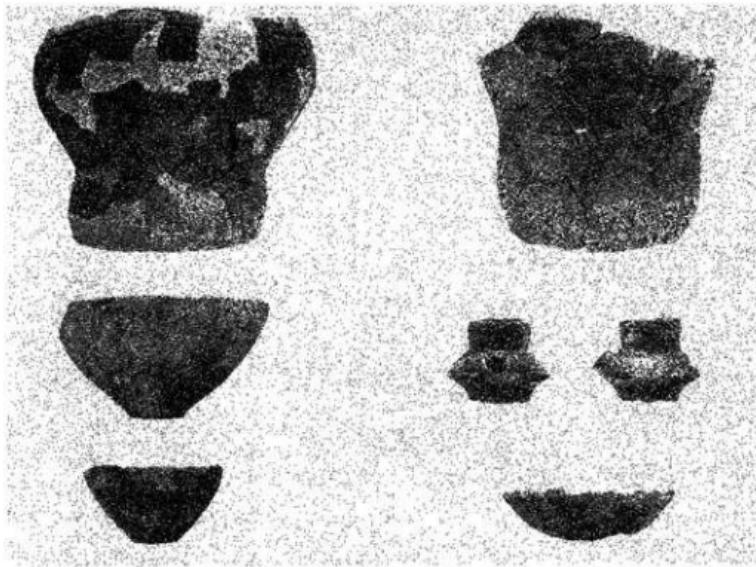
8. 表土除去状況スナップ



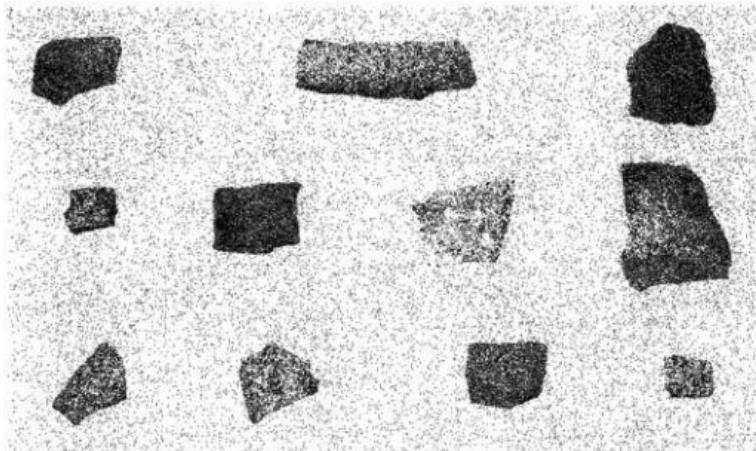
9. 調査スナップ



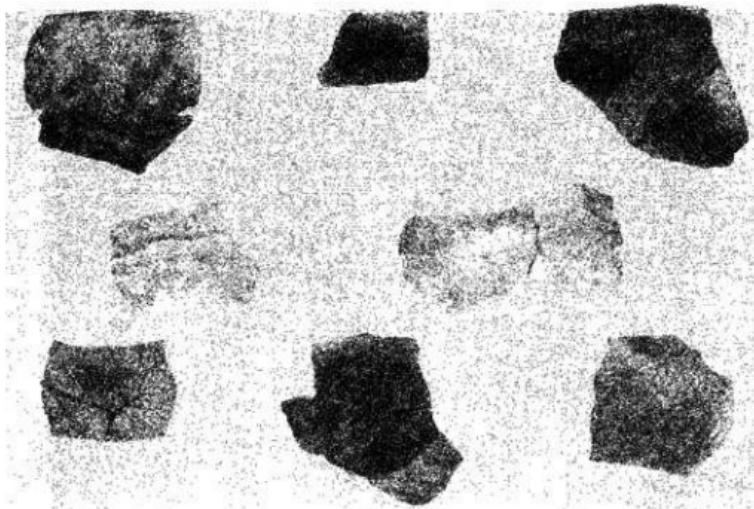
10. 調査スナップ



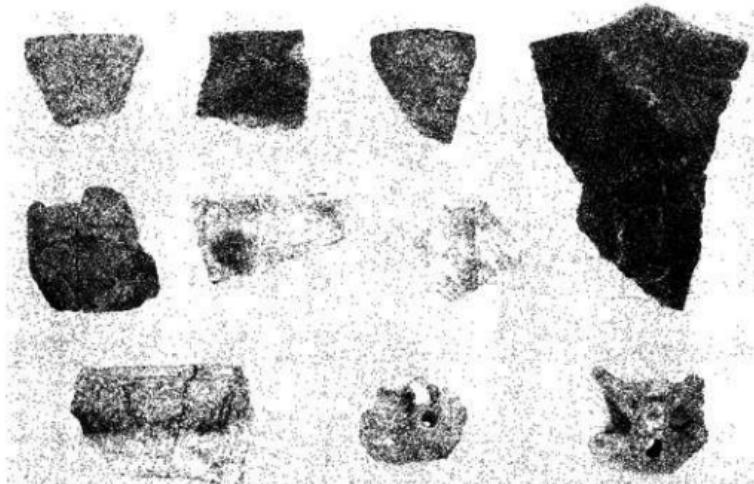
11. 第1号土壠およびグリッド出土土器



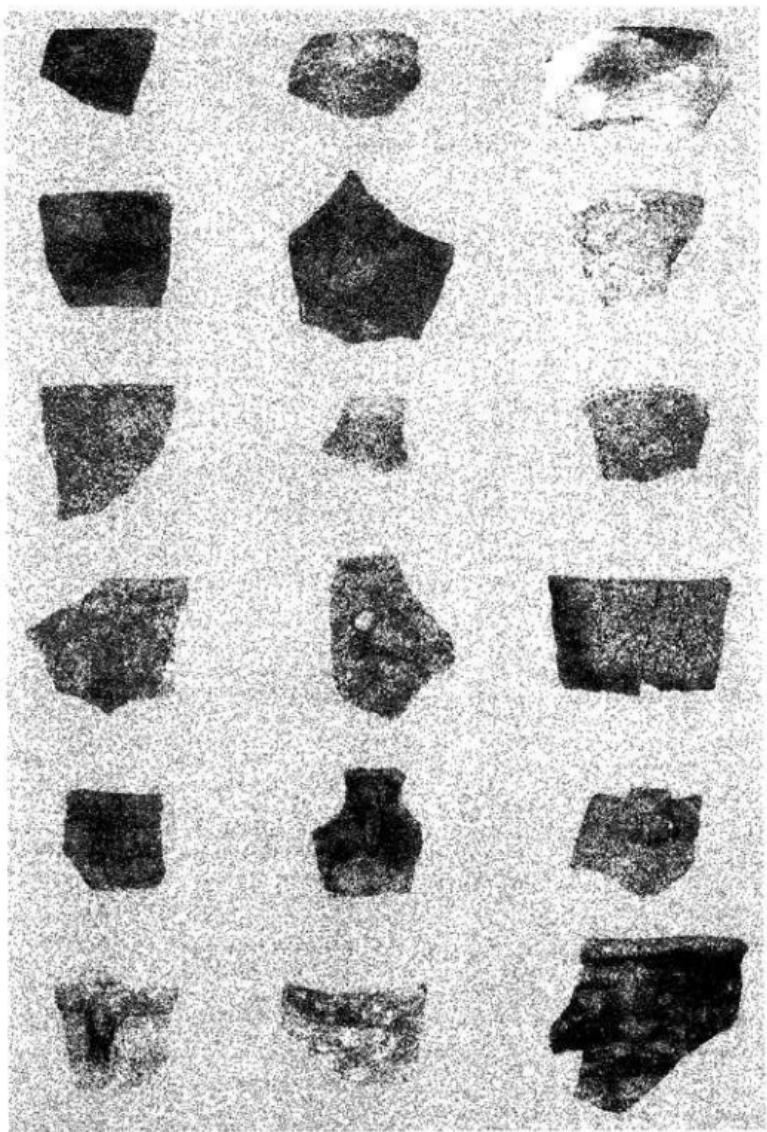
12. グリッド出土土器



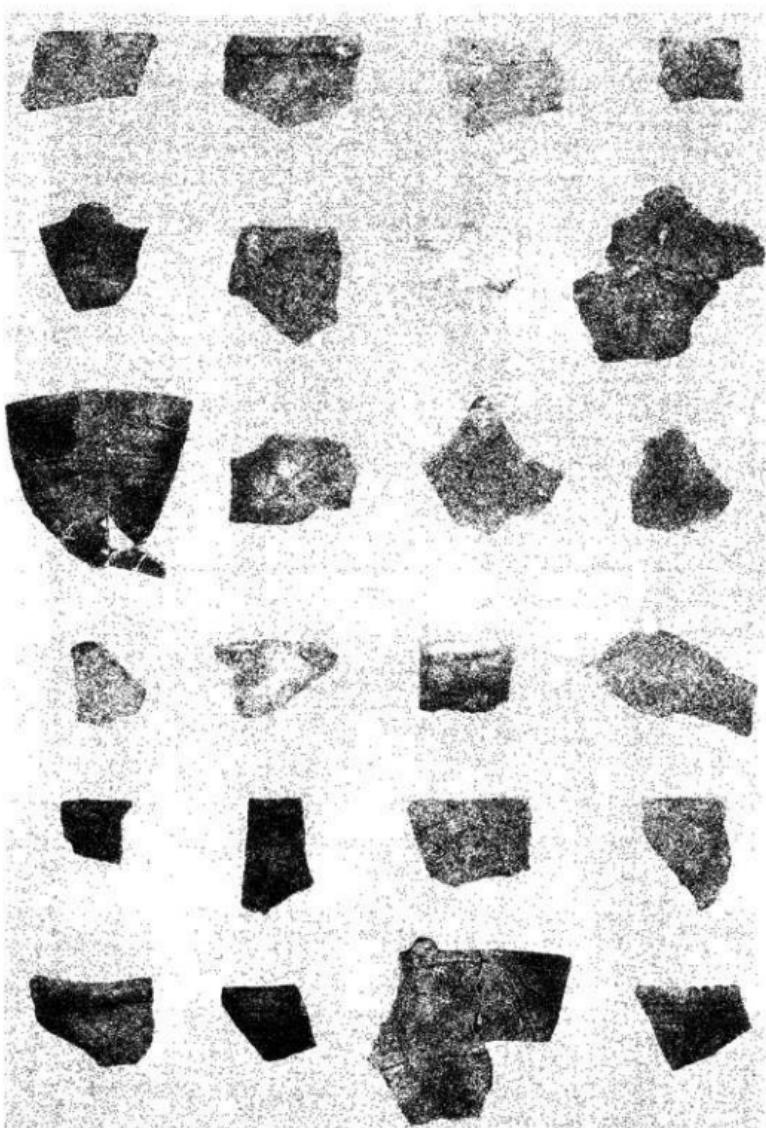
13. グリッド出土土器



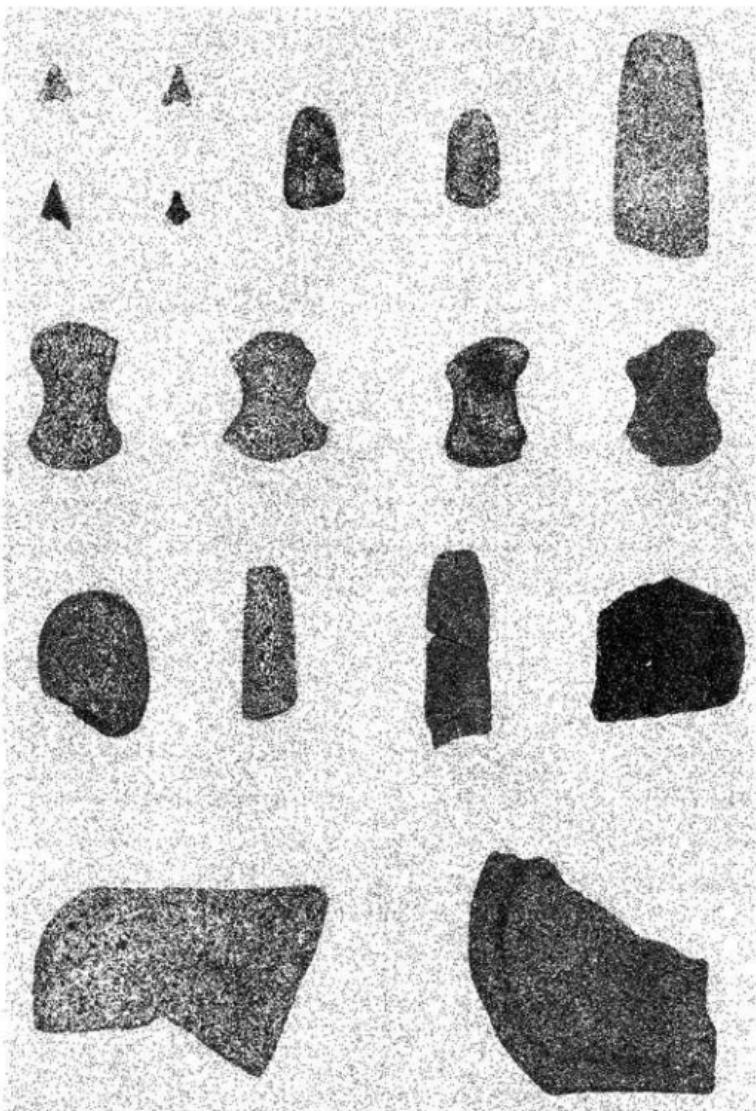
14. グリッド出土土器



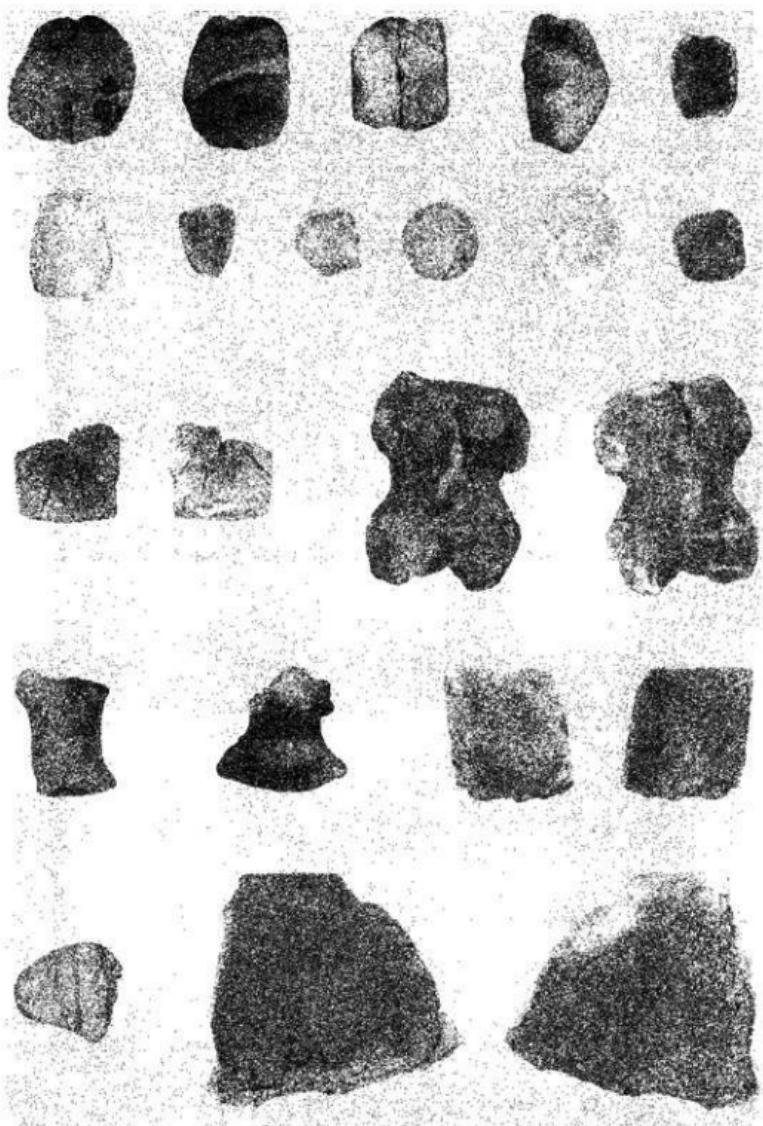
15. グリッド出土土器



16. グリッド出土土器



17. グリッド出土石器



18. グリッド出土土製品、石製品

埋蔵文化財調査（園生貝塚）報告書
——昭和63年・平成元年度——

平成2年3月31日発行

発 行 千葉市教育委員会
〒280 千葉市千葉港2-1
TEL 0472(41)7721

印 刷 株式会社 ハシダテ
〒260 千葉市新港 116-1
TEL 0472(43)3311